

インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器

Ceramics from the Site of Banten in Indonesia

大橋康二・坂井 隆

- ①バンテン遺跡群調査の経緯
- ②バンテン遺跡群の概要
- ③バンテン遺跡出土の陶磁器

【論文要旨】

インドネシアのジャワ島西部に位置するバンテン遺跡は16世紀から18世紀にかけて栄えたイスラム教を奉ずるバンテン王国の都であった。1976年以来、インドネシア国立考古学センター（The National Research Center of Archaeology）などにより、この地域の発掘調査が続けられ、膨大な量の陶磁片が出土した。これを整理した結果、25,076個体を産地、年代、種類毎に分類し得た。主に16世紀から18世紀の陶磁器であることは、バンテン王国の栄えた時代と符合する。この間も時期毎で陶磁器の産地、種類の割合・内容が変わる。

I期（15世紀以前）の陶磁器はほとんどなく、II期（16世紀前半～中葉）になると、景德鎮磁器が少量出土するが全体に占める割合は1%とまだ少ない。

III期（16世紀末～17世紀前半）からV期（18世紀）の陶磁器は全体の89%を占め、バンテン王国の歴史を裏付けている。III期の中でも、1590年代以降の中国磁器が多く、この時期には景德鎮（35%）に加えて福建南部地方の磁器が加わり、45%を占めることになる。この頃、オランダ続いてイギリスもアジア貿易に参入した。

IV期（17世紀後半～18世紀初）には1644年以降の明清の王朝交替に伴う内乱で中国磁器の輸出が激減したため、肥前陶磁器の輸出が始まり、1683年までの間は中国磁器より量的に多いと思われる。1684年に貿易の禁止が解かれると再び中国磁器の輸出が盛んになる。

V期（18世紀）の前半は再び多量に輸出されるヨーロッパ向け景德鎮磁器に圧倒されながらも、肥前（有田）磁器の輸出は残る。景德鎮と肥前の製品はヨーロッパ向けが主であり、東南アジア向けの製品は福建・広東系磁器がIV期に引き続き主体である。

VI期（18世紀末～19世紀）の中でバンテンがオランダによって破壊された歴史を裏付けるように、中国磁器はこの時期の前半のものが少量見られるだけである。

①……………バンテン遺跡群調査の経緯

1 調査目的と経過

インドネシアの西部ジャワのバンテン Banten は、東西貿易の要衝スダ Sunda 海峡に面し、コショウの世界的な産地であった。また陶磁貿易の重要な中継地でもあり、特にバンテン・ラーマ Banten Lama 遺跡では、主に16世紀から18世紀にかけての多彩な陶磁器が大量に出土している。

最大15万人の人口のあった東西約2キロ、南北約1キロのこの港市遺跡は、1976年以来インドネシア国立考古学研究センターなどにより発掘調査が続けられている。またスロソワン Surosowan 王宮跡などを中心とする主な地点では復元整備がなされ、その過程で出土した膨大な陶磁片は大部分が未整理のまま同センターのバンテン分室に収蔵されていた。

バンテンの世界陶磁貿易における重要性、またそこに日本の肥前陶磁が少なからず含まれていることを知った時、日本の陶磁研究者は誰もこのバンテンの陶磁片研究の大きな意義を感じざるをえなかった。

そこで我々は、1990年にインドネシア側との共同研究を目的として「バンテン遺跡研究会」（青柳洋治代表）を結成した。こうして共同研究事業の一環として、同センターと共に1993年12月及び97年10月の2回、陶磁片整理調査を行うことになった。その目的は、時期・産地・種類ごとの量の把握、そしてそれに伴う分類整理である。

第1次調査（三菱銀行国際財団助成）では、インドネシア側4研究機関から研究者の参加があった。また第2次調査は、民族調査・発掘調査を含むバンテン地域研究共同調査（日産科学振興財団助成）の一部を占めるものである。

2 研究史

インドネシア国立考古学研究センターの発掘調査は1976年に開始されたが、すでにその最初の調査の際に出土陶磁片に対する関心が生まれていた。⁽¹⁾特に日本の肥前陶磁研究の進展あるいはジャカルタのバサール・イカン Pasar Ikan 遺跡の調査などを踏まえて、⁽²⁾バンテンでの陶磁片研究の気運は徐々に高まった。その中で、故三上次男博士ら日本研究者の注目を集めることになった。

そして、1990年の『海を渡った肥前のやきもの展』⁽³⁾でバンテン・ラーマ出土の肥前陶磁片が日本に出品・展示されたことが、大きな進展に繋がった。翌91年にはナニッ・ウィビソノ Naniek Wibisono は、それまでの調査での肥前陶磁片の出

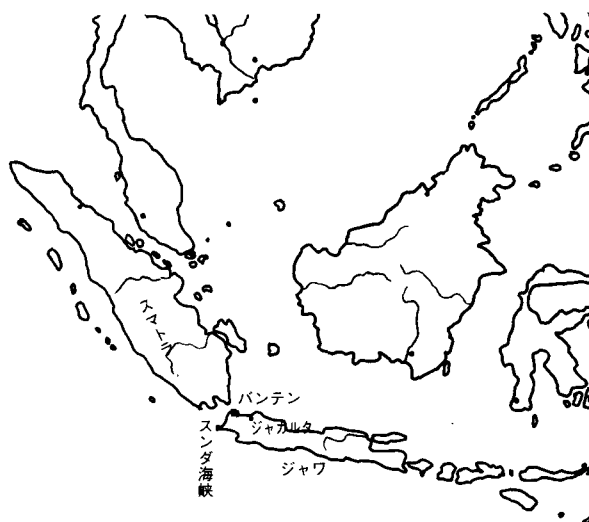


図1 バンテンの位置

土状況をまとめ⁽⁴⁾、さらに1992年にはバンテンで「インドネシア出土の日本陶磁国際セミナー」(国際交流基金助成)が開催され、日本からは7名(長谷部楽爾、青柳洋治、生田 滋、小野正敏、前山 博、大橋康二、坂井 隆)の参加者があった。この時以降、遺跡の保護整備行政を直接担当していた西部ジャワ等文化財管理事務所では、故ハルワニ・ミフロブ Halwany Michrob 所長を中心に、積極的に陶磁片の保護及び資料活用を図るようになった。

この頃バンテンの陶磁片については、表面採集資料などが部分的に報告されることがあり⁽⁵⁾、また一部は我々の共同研究の中で図録として紹介している⁽⁶⁾。しかし発掘調査資料の全容については正式な報告がなされていないこともあり、ほとんど未解明であった。

そのため、中国・日本磁器を対象とした我々の第1次調査⁽⁷⁾は、最初の本格的な陶磁片調査となった。そしてこれが契機となって、考古学研究センターのバンテン分室には陶磁片の研究を主とする遺物整理室も整備されるようになった。また我々の第2次調査は、陶器と第1次調査で漏れた中国・日本磁器を対象とした。

この両次の調査は、併行して行われていたバンテン遺跡群の発掘調査にも多少なりとも影響を及ぼし、フランスとインドネシアの共同調査であるバンテン・ギラン Banten Girang 遺跡の調査報告⁽⁸⁾の中では陶磁片の分析が重要な要素を占めるようになったのである。

(坂井 隆)

②……………バンテン遺跡群の概要

1 バンテンの歴史概観

15世紀以前のバンテンの状況はあまり明確ではない。ただ遅くとも11世紀までには、バンテン川 Ci Banten 河口から13キロ上流で現在のセラン Serang の南郊3キロに位置する、バンテン・ギランに環濠遺跡が成立していたことは確かである。

バンテン・ギラン(上バンテン)は内陸の河川港市だが、河口のバンテン・イリル Banten Ilir(下バンテン、現在のバンテン・ラーマ)にも同時期の拠点があったことは、ここでのヒンドゥ神ナンディ像の出土からも間違いない。

中国資料には、13世紀初頭の『諸蕃志』にコショウの産地としてスンダと思われる地名が記されており、『元史』によれば1322(至治2)年には、バンテンからの使者が元に来ている。その後17世紀初頭の『東西洋考』には、バンテンが「下港」として登場する。

15世紀代には、百キロ南東のボゴール Bogor の近くのパクアン Pakuan を本拠地としたパジャジャラン Pajajaran ヒンドゥ教王国の支配下に入っていた。マラッカ Malaka のポルトガル人トメ・ピレス Tome Pires が16世紀初頭に記した『東方諸国記』には、パジャジャランの港としてカラパ Kalapa(現在のジャカルタ)以下6港が上げられ、その中の一つであるバンテンは米・食料・コショウの産地とされている⁽⁹⁾。

1527年、パジャジャランと同盟したポルトガル艦隊を、ファディーラ・ハーン Fadillah Khan はカラパで破った。彼は中部ジャワのイスラム教王国ドゥマツ Demak 王の一族で、やがて西部ジャワの沿岸部を占領し、バンテンをイスラム布教の拠点とする。この時、バンテンの中心地はギラン

からラーマ（イリル即ち中国資料の「下港」）へ移っている。やがて16世紀中葉、彼の子ハサヌデイン Hasanudin は、ドゥマツの弱体化に伴い自立し、ここにイスラム・バンテン王国が成立した。

その後1570年頃までに残存していたパジャジャラン勢力を完全に打ち破って、西部ジャワからスンダ海峡をはさんだスマトラ南部のラムプン Lampung 地方までを支配下に治めている。この時イスラム・バンテンは、未曾有の繁栄をとげることになる。それは、世界的な交易商品コショウの産地である海峡兩岸を押さえたからだけでなく、スンダ海峡そのものがマラッカ海峡に代わる東西交易の要衝になったからでもある。

バンテンの地位に決定的な変化が起きるのは、バンテンへの初来航から23年後の1619年、オランダがジャヤカルタ Jayakarta（カラバ）を占領してバタヴィア Batavia という対抗港市を建設した時からである。

以後、1682年までの間、バンテンは僅か90キロしか離れていないバタヴィアと東西交易の覇権を取り戻すべくさまざまな形で対立を続けた。特に1651年にティルタヤサ Tirtayasa 大王が即位して以後の30年間、バンテンの復権は台湾鄭氏あるいはイギリスなどとの交流により一定度の達成を収めている。16世紀末に10万人あった人口は、1670年代には当時の世界の港市でも最大規模である15万人まで増加することになった。

しかし、1680年、オランダはティルタヤサ大王と息子ハジ Haji 王との対立に介入し、ついに82年にはティルタヤサを屈服させ、バンテンを保護下に置くことに成功した。この時、戦火の中でバンテンは灰塵に帰した。その結果、17世紀末には人口は一時4万人まで急減している。

けれどもなお華人たちとの交易は増大しており、18世紀前半まで港市バンテンの経済的意味は依然として大きかった。それは1694年（元禄7）にバンテン出帆の唐船が長崎に来ていることから知られる。やがて、1750年にオランダに対する最大規模の反乱が鎮圧されて以後、バンテンは完全に保護領の状態に落とし込まれた。それでも1795年には9万人の人口があったと言われる。

1811年、ヨーロッパのナポレオン戦争の影響でジャワ支配に動揺が起きた時に、バンテンの再興を恐れたオランダは、バンテン王国を完全に消滅させスロソワン王宮を破壊した。以後、僅かに16世紀以来のイスラム大寺院 Mesjid Agung Banten を除いて、人々が活動する建造物はなくなり、一寒村に帰ってしまった。

2 バンテン遺跡群の構成

バンテン地域では、現在まで大きく分けて次の3遺跡で調査が行われてきた。

1) バンテン・ギラン遺跡

ここは、11世紀以来15世紀までのヒンドゥー時代の拠点である。バンテン川の蛇行部左岸に形成された環濠遺跡で、特に13世紀頃の中国陶磁が大量に出土している。時期が異なると思われる内部面積の狭い二重の環濠があり、その外側対岸にも蛇行を利用した郭部分が複数存在する。

1990年からは、フランス極東学院と考古学研究センターとの共同調査が3年間行われている。調査対象の中心は、外側環濠の西部分であり、埋土下層の炭化物層直下からは上記13世紀代の陶磁片が多量に見られた。⁽¹⁰⁾

2) バンテン・ラーマ遺跡

16世紀～19世紀初頭のイスラム・バンテンの中心港市遺跡。バンテン川旧河口に位置し、スロソワン王宮跡など廃虚となった建築群跡が点在し、町を囲んでいた城壁も僅かに一部が地上に見られる。16世紀以来の建築様式が残るイスラム大寺院と18世紀後半に建立された華人寺院観音寺は、現在でも多くの信徒で賑わっている。

1976年に現在の国立考古学研究センターが最初に発掘調査⁽¹¹⁾を行って以来、現在まで数多くの調査がなされた。その成果の一部は、インドネシアでは珍しい存在の遺跡博物館に展示されている。

3) ティルタヤサ遺跡

バンテン・ラーマの東約18キロのウジュン川 Ci Ujung のかつての河口近くに位置する、1677～82年という短期間しか使用されなかったティルタヤサ大王の離宮遺跡である。地上に残るのは宮殿の一部の塚（高さ3メートル径30メートルほど）だけだが、煉瓦の建物跡は、現地表にも見え隠れしている。

1997年、出土陶磁片の組成及び遺構概要の確認を目的とする発掘調査を、我々のバンテン地域研究共同調査⁽¹²⁾の一部として実施した。

3 バンテン・ラーマ遺跡の特徴

バンテン・ラーマは、1635～39年に製作されたオランダ人の地図⁽¹³⁾に最も良く都市構造が示されている。それによれば、河口近くのバンテン川左岸に接する王宮前広場を中心に、東西に長い長方形の区画（約1.5×1.0キロ）を城壁で囲んでいる。

城内は、南東から北西に流れるバンテン川（現在の川幅約10m）によって大きく二分される。城壁外にバンテン川から引いた濠が巡っており、大きく城内と東西の城外に区分が生じている。

1976年以降本格化した発掘調査は、城内左岸のスロソワン王宮跡で最も集中的になされている。また王宮跡以外でも城外も含めて部分的な調査は、右岸のスピルウィク Spilwjik 要塞跡及びカイボン Kaibon 離宮跡などを中心に行われてきた。しかし調査面積は左岸の王宮跡が圧倒的に多く、その他の地域は部分的なものにすぎない。

左岸と右岸は均等に発展したのではない。左岸の性格は、川沿いに古くから存在した市場を基礎として発展した王宮・

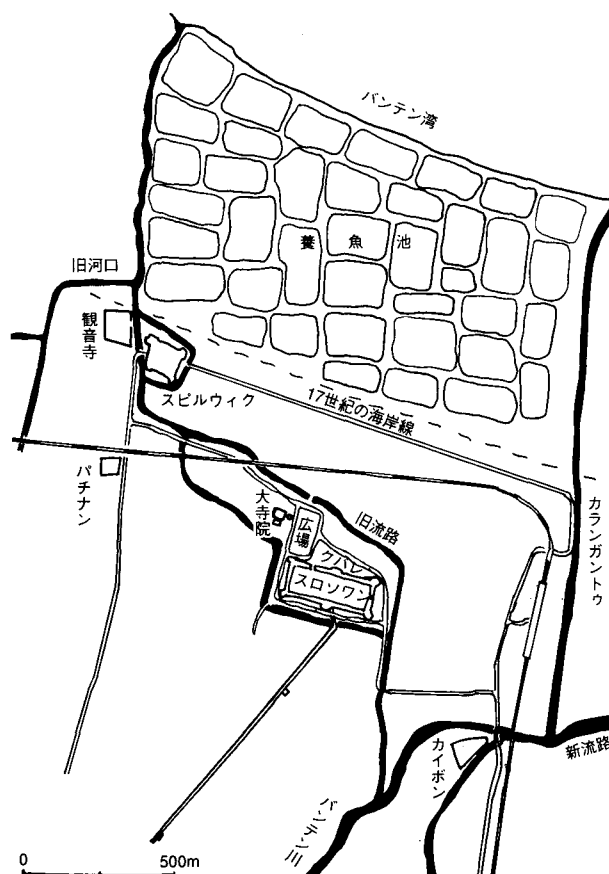


図2 現在のバンテン・ラーマ

イスラム大寺院及びそれに付随する職人地区と言える。これに対し、右岸は新しく生まれた複数の貴族たちが管理する貿易地区としての役割が指摘できる。税関やコショウ集積地のあった西城外は城内左岸の、貿易大市場のあった東城外は城内右岸の延長上の地域と考えられる⁽¹⁴⁾。

古地図によれば36の地区より成り立っていたが、これまで行なわれた発掘調査は、ようやく次の15の調査地に過ぎない。

城内左岸：カパンデアン（金属職人地区）・バジャントラン（織物職人地区）・カイボン（王母宮殿）・スロソワン（王宮）・カバレン（バリ人居住地）・カゴンガン（銅鑼職人地区）

城内右岸：カロラン（ロル公邸宅地）・カワンサン（ワンサ公邸宅地）・パンジャリンガン（漁民居住地）・スピルウィク（オランダ要塞）

東城外：カランガントウ（大市場・マレー人居住地）・パンジュナン（陶器職人地区）

西城外：パペアン（税関地区）・パマリチャン（コショウ集積地）・パチナン（華人居住地）

これらの調査地より、20万点以上の陶磁片が出土している。産地別では、全遺跡で中国・ヨーロッパ陶磁が出土している他に、日本陶磁出土が11調査地、タイ陶磁出土が9調査地、ヴェトナム陶磁出土が6調査地、ベルシャ陶磁出土が1調査地である⁽¹⁵⁾。そのうち、全産地の陶磁器が出土したのはスロソワンだけで、ベルシャ陶磁以外全てが見られたのが、西城外のパチナン Pacinan と城内右岸のカロラン Kaloran・カワンサン Kawansan・パンジャリンガン Pnajarangan であった。

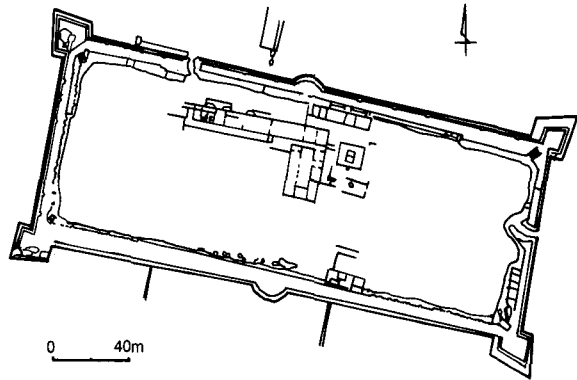


図3 スロソワン王宮跡

4 スロソワン王宮跡

バンテン・ラーマの中心であり、これまでの発掘調査の最大の対象地となった。旧バンテン川の左岸に接する王宮前広場の南東側に位置する。広場の西側には、現在も多くの参拝者で賑わうイスラム大寺院がある。

現在見られる王宮跡の城壁（高3m、最大幅14m、東西282×南北140m、内部面積約23,600平米）は四隅に稜堡を伴う長方形で、1680年に亡命オランダ人技術者が築造したものである。この城壁は基本的に土塁構造だが、外面には珊瑚石灰岩の切石が積まれている。またその内側には煉瓦積みの外面もあり、少なくとも同一プランで2時期の構造が存在する。なお長辺の走向はイスラム教徒にとって重要な意味を持つメッカの方向に準じている。

内部空間で発掘調査されたのは、北西側の正門近くを中心とする一帯で、面積としてはまだ5分の1以下に過ぎない。3基の半円形階段を持つ煉瓦積磚築の儀礼的な建物の一部・水浴場・上水道施設などが検出されているが、いずれも確実に2時期以上の建物が重複している。

さらに、城壁北外側の調査でも、多くの建物基礎が確認されており、現城壁建造以前の時期も当然存在する。発掘調査によれば、その第1期（1680年以前）では、全体規模は小さかった（100～

120m 以内) ことが想定されている。この時期の王宮は防備施設が乏しく、絵画資料では僅かに広場側のみ木柵と小さな濠が見られるだけである。

そのように遺構は構造上 3 時期に区分できるが、小グリッド方式の調査の制限もあって出土遺物は明確には識別されていない。出土位置が現城壁の内側か外側かが、基本的な判明事項である。

5 その他の施設

地上に現存する廃墟の中で、発掘調査されたのは、主に次のものである。

カイボン宮殿跡 スロソワン王宮跡から南東約 500m 離れ、現バンテン川放水路と旧バンテン川流路に挟まれた地域にある。

19 世紀初頭に建立された最後のスルタンの王母宮殿と言われ、割れ門が連なる煉瓦積み外壁とイスラム寺院跡そして本殿の一部が現存する。しかしバンテン川の流路変遷が重なったため、全体構造を把握することは難しい。

ここで発見された陶磁片は、17 世紀代のものも少なくない。17 世紀には、バンテン川が城内に入る地点にあっており、すでに当時の何らかの施設が存在していた可能性がある。

スピルウィク要塞跡 スロソワン王宮跡の北西に約 800m 離れた旧バンテン川の河口部右岸に位置する。

この要塞はオランダが 1685 年に築いたもので、変形四角形（一辺約 100m 強）の構造をなし、珊瑚石灰岩を主な構築材料としている。興味深いのは、この要塞内部にバンテン・ラーマの市壁（下幅約 1.5m 高さ約 4 m）が取り込まれて残っている点である。

旧バンテン川河口の対岸の「税関地区」には、現在 18 世紀後半以降に建立された華人寺院観音寺がある。その対岸と共に要塞築城以前においてもバンテン・ラーマの中でも、重要な経済活動拠点であった。

華人地区跡(パチナン) スロソワン王宮跡の西約 600m 方向で、イスラム寺院跡そして 19 世紀の華人墓が残っている。牛頭装飾を施した煉瓦積み建物跡が、最近地中から発見された。

この地域は旧西城外にあたるが、ここが華人地区になったのは少なくとも 1630 年代以降で、1590 年代の木柵に囲まれた華人地区は現在の観音寺のあたりにあった。

バリ人地区跡(クバレン) スロソワン王宮の北側に隣接し、現在の遺跡博物館と考古学センター分室にあたる。

バンテン川旧流路左岸に隣接し、17 世紀には王宮兵器庫などがあったとされる地域である。博物館及び考古学センター施設の建造に伴い調査された。

大市場跡 スロソワン王宮跡の北東約 700m に位置する。現在も活気があるカラングントゥ Karangantu 港とその市場にあたる。発掘調査は、現在の市場の南側パンジュナン Panjunan 地区で行われた。

16 世紀末には東城外にあたり、「第一の市場」として最大の国際貿易地だった。遺跡博物館に展示されている青銅巨砲「キ・アムツ」は、今世紀初頭にはここにあったと言われている。

(坂井 隆)

③……………バンテン遺跡出土の陶磁器

1 はじめに

バンテン遺跡から出土した陶磁器片は20万点をはるかに上回るであろう。1993年と1997年にこれらを全て分類整理する作業を行った。展示品など分類整理の対象からはずれたものも若干あるが、出土品の傾向には影響がないとみられる。

現地での分類作業によって産地、種類、器形、文様の順に細かく分けられていった。しかし、作業の時間的な制約などからある程度のまとまりを1グループとせざるをえなかったものもある。そのグループ毎に適当と思われるものを選択して、図化あるいは写真の撮影を行った。

またバンテン遺跡出土の陶磁器は、整理分析を行った結果、次のように時期区分した。

- I 期……15世紀以前
- II 期……16世紀前半～中葉
- III 期……16世紀末～17世紀前半
- IV 期……17世紀後半～18世紀初
- V 期……18世紀
- VI 期……18世紀末～19世紀前半

陶磁器の説明を行うにあたって、それぞれの時期毎にまとめる。説明中の個体数は、分類した結果、1つの種類が多くある場合には、底部が残存している破片数とした。しかし少量で底部片がない場合には口縁部片の数量とし、破片が1点のみの場合、胴部片でも1個体と推定した。

I 期すなわち15世紀以前の陶磁器はバンテングラン遺跡では多く出土しているが、バンテン・ラマ遺跡ではほとんどみられない。

以下、II 期以降の陶磁器を産地毎、時期毎に説明する。

2 陶磁器の時期・産地別概要

(1) 中国磁器 (第1～4 図)

A 景德鎮窯系

景德鎮窯は江西省の景德鎮を中心に焼かれた明時代以降、最大の磁器生産地である。

II 期

図1・2は染付碗。1は見込と外面に小さな花文かと思われる文様を描く。底面が下方に垂れたいわゆる蓮子(レンツー)形碗である。同類品は23個体(以下個体数のみを記す)。2は見込に巻貝文、外面腰部に蕉葉文、口縁部に花かと思われる文様を描く。8個体。両種の碗はともに日本でも一般的にみられる。16世紀前半～中葉。図3は染付小皿。底部は碁笥底に削るのが特徴である。見込に花卉文、外面腰部に蕉葉文を描く。9個体。これも日本でしばしばみられる。16世紀前半～中葉。図4・5は染付皿。4は口径30.6cmの大皿であり、口縁部を折縁に作り、見込に花を中心に蓮弁文帯と唐草文帯が二重にめぐり、口縁部には四方襷文帯、外側面に唐草文帯を配す。同じような皿197個体。日本では類例を知らない意匠の大皿である。類例はトルコ・トプカプ宮殿収蔵の

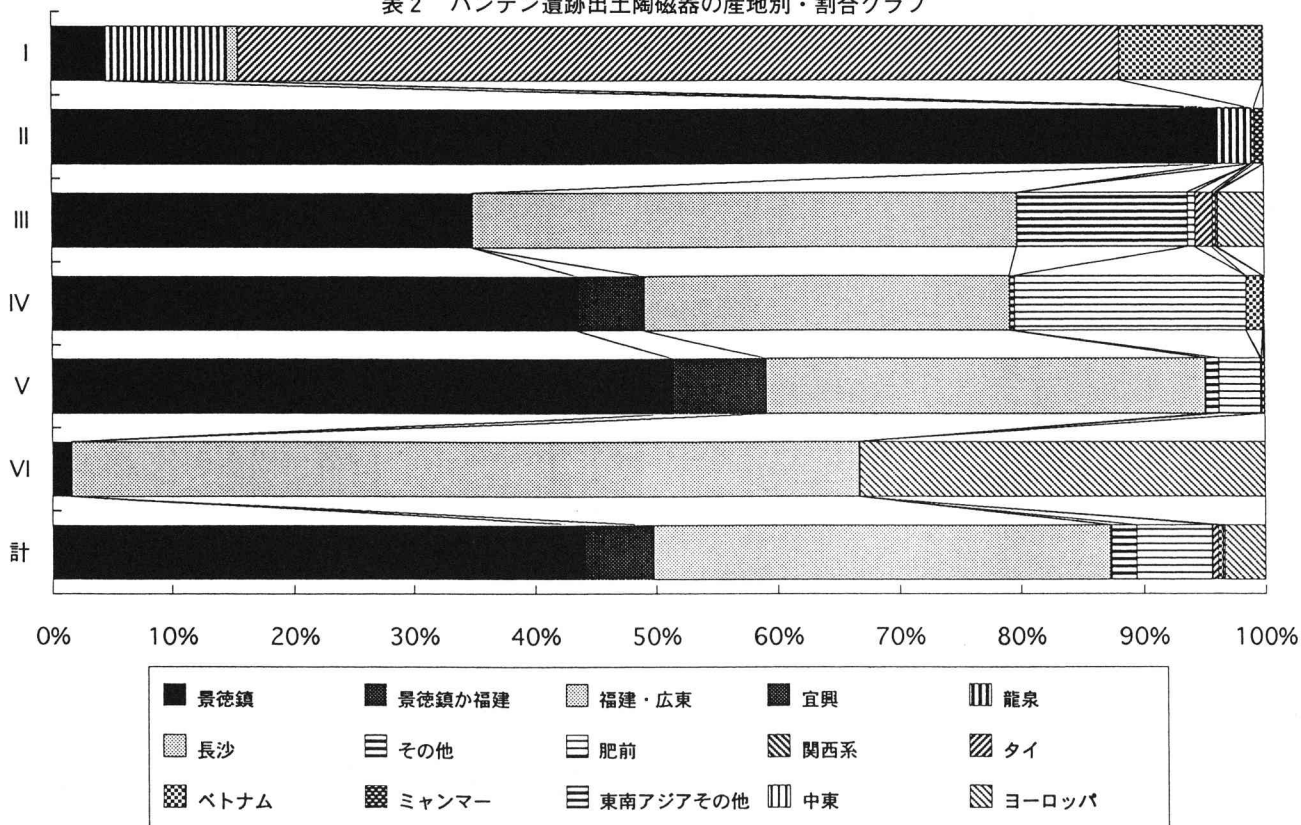
表1 バンテン遺跡出土陶磁器の産地別・時期別個体数

時期	中国												日本					
	景德鎮		景德鎮か福建		福建・広東		宜興		龍泉		長沙		その他		肥前		関西系	
I	5	4.55%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	11	9.91%	1	0.90%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
II	354	96.20%	0	0.00%	1	0.27%	0	0.00%	9	2.44%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
III	834	34.92%	0	0.00%	1,071	44.83%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	333	13.94%	14	0.59%	0	0.00%
IV	2,349	43.55%	298	5.52%	1,624	30.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	22	0.41%	1,017	18.85%	0	0.00%
V	7,488	51.40%	1,120	7.69%	5,241	35.97%	10	0.07%	0	0.00%	0	0.00%	156	1.07%	501	3.44%	16	0.11%
VI	36	1.60%	0	0.00%	1,462	65.07%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.04%
計	11,066	44.13%	1,418	5.66%	9,399	37.48%	10	0.04%	20	0.08%	1	0.00%	511	2.04%	1,532	6.11%	17	0.07%

東南アジア						中東		ヨーロッパ		計
タイ	ベトナム		ミャンマー		その他	中東	ヨーロッパ			
80	72.08%	13	11.71%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	111
0	0.00%	1	0.27%	3	0.81%	0	0.00%	0	0.00%	369
33	1.38%	7	0.29%	0	0.00%	3	0.13%	1	0.04%	2,389
0	0.00%	76	1.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%	5,395
0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	27	0.19%	0	0.00%	14,570
0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	747	33.25%	2,247
113	0.45%	97	0.39%	3	0.01%	30	0.12%	2	0.01%	25,076

註 数字は推定個体数

表2 バンテン遺跡出土陶磁器の産地別・割合グラフ

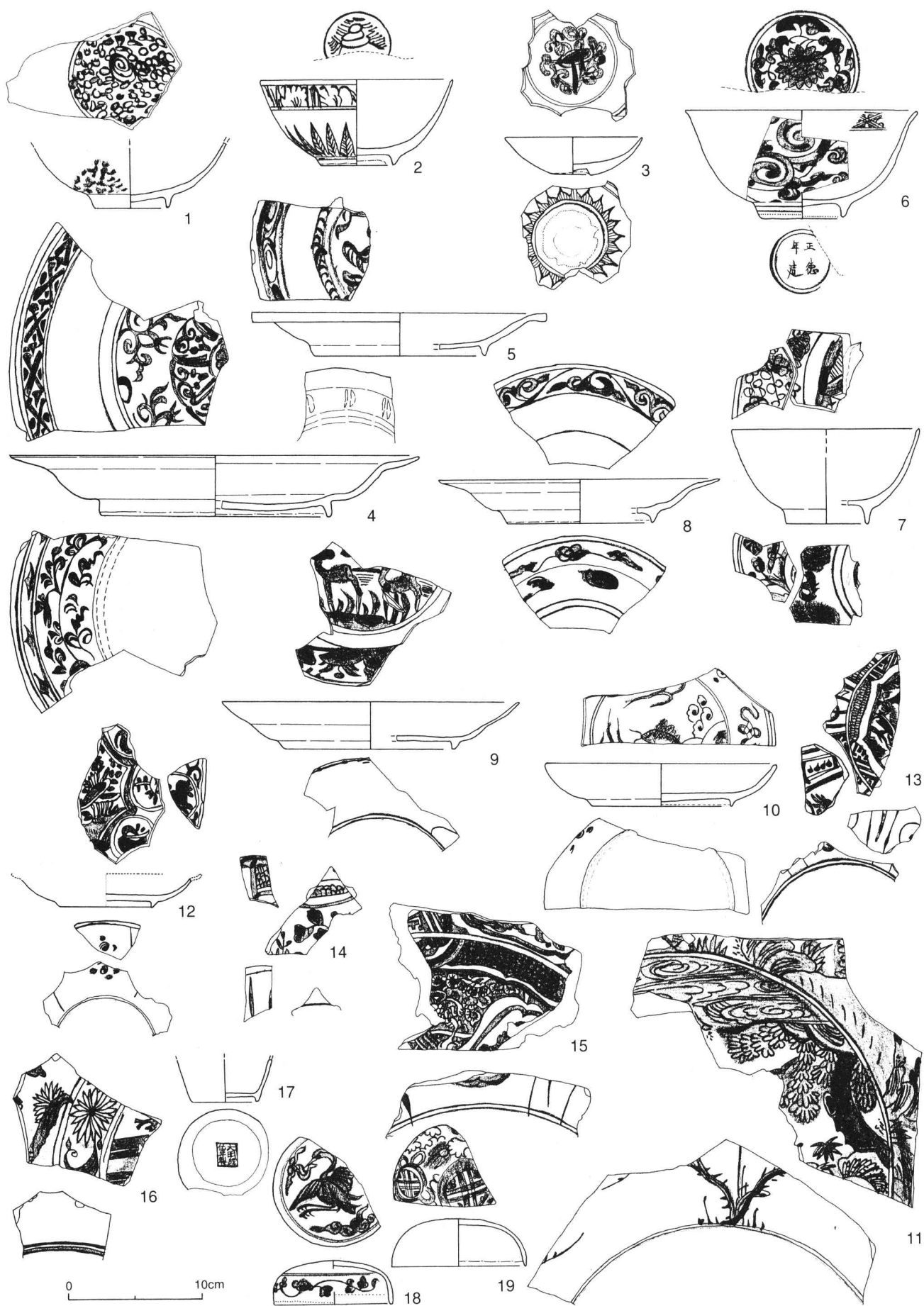


No. 781・782にあり⁽¹⁶⁾（以下、トブカブ宮殿収蔵品の番号は全て註16の出典に基づく）、16世紀初とする。見込の蓮弁に花文もトブカブのNo. 682の見込文様を崩した表現とみられる。5は口径23cmの中皿であり、折縁に作る口縁部を稜花形に刻む。見込に玉取獅子文を描き、口縁部に渦文帯をめぐらす。外側面に篋彫りによる縦筋（本来、蓮弁を表したものか）を刻む。9個体。この種の皿は日本でもいくらか出土例がある。これらの年代は16世紀。

図6は染付鉢。見込に菊唐草文、外面に龍唐草文、内面口縁部に四方禪文帯、高台内に「正徳年造」銘を染付する。42個体。「正徳」は1506～21年であり、似たような龍唐草を描いた皿がトブカブ宮殿の皿（No. 785/787/788）にあり、16世紀初とするから、「正徳年造」銘は製品の年代と考えてよからう。こうした鉢は日本での出土は少ない。図版1-1は染付水注（クンディ）。乳首形の注口部分の破片であり、花唐草文が染付されている。1個体。クンディの出土は、日本では長崎・万才町遺跡など極めて少なく⁽¹⁷⁾、比較的似通った注口部の例はインドネシア・ジャカルタ国立博物館所蔵品にある⁽¹⁸⁾。16世紀前半～中葉。

Ⅲ期

図版1-2は染付小坏。見込に海上に浮かぶ三神山文を描く。外面腰部に波濤文、高台内に「大明年造」銘を染付する。3個体。長崎県平戸和蘭商館跡で類品が出土しているが、日本では少ない⁽¹⁹⁾。16世紀第4四半期～17世紀初頭。図版1-3は色絵皿か鉢。見込には図版1-2と同様の文様を赤中心に表す。外面腰部に蓮弁文（?）、高台内に「□□年造」銘を二重圏線内に赤で記す。8個体。年代も2と同じ。日本での出土例は知らない。図版1-4は色絵碗。染付で文様の一部を描いた素地に赤・緑・黄などの色絵具で加彩したもの。外面は窓絵と花卉文、内側面に瑤珞文、口縁部に四方禪文帯を表す。20個体。16世紀後半。日本では見ないタイプである。図7は染付碗。1590～1610年代。見込に花卉文、内側面に葡萄文、外面松梅文を描く。31個体。長崎市栄町遺跡で出土している⁽²⁰⁾。また伝世品はトブカブ宮殿収蔵品No. 1531にあり、17世紀初とする。図8・9は染付折縁中皿。8は口縁部に唐草文、外面にも花唐草文を描く。6個体。1590～1630年代。9は見込に樹下鹿文、折縁口縁部に水鳥に草花文を描く。32個体。類例は長崎市栄町遺跡2区12号土坑出土品がある。伝世品では、ポルトガル・リスボンのANASTÁCIO GONÇALVES博物館収蔵品にある⁽²¹⁾。これらを見ると口縁部は稜花形に刻む。1590～1610年代。図10は染付中皿。丸形であり、見込に跳魚図、内側面に宝文、外側面にも宝文を描く。93個体。日本での出土例は知らない。1590～1630年代。図11は染付大皿。内面に山水風景を表し、外面には樹木を表す。6個体。このように大きなサイズの大皿は日本では元染付を除くと、芙蓉手大皿が江戸初期に平戸和蘭商館跡などで少量出土する程度で少ない。しかもこのように芙蓉手以外の意匠となるとさらに出土例は希である。1590～1630年代。図12は染付皿。口径はおよそ14.6cmであり、型に当てて側面の窓枠などを陽刻で表す。34個体。こうした宝珠形の窓と見込周囲のまりばさみのデザインの皿を日本では一般に名山手と呼んでいる。芙蓉手の一種であり、小皿中心に作られ、日本でも出土例は多い。見込は花鳥文、側面の窓内に花卉と宝を交互に描く。外面も区画し宝文を染付する。1590～1630年代。図13・14は染付芙蓉手皿。中・大皿の破片であり、精粗がみられる。13は14に比べて精緻な作行きである。内側面は芙蓉手の特徴である区画内に花卉と宝文を描く。見込周囲には紗綾形と三角（?）地文を伴うまりばさみ文を配す。外側面も区画内に宝文を表す。これら芙蓉手皿も側面の区画文は型を当てて陽刻した素地に染



第1图 中国磁器(1)

付する。13は41個体、14は3個体。14のような粗製のタイプは13よりも後出とみられ、崇禎16年(1643)とみられる「癸未」銘の染付を伴うハッチャー・ジャンク引揚げ品(南シナ海の沈没船引揚げ資料)の中に共通する特徴がみられる⁽²²⁾。また寛永13年(1636)にできた長崎出島から出土した芙蓉手大皿もこれに近い。出島はポルトガルが入り、寛永18年(1641)に平戸よりオランダ商館が移転する。こうした芙蓉手皿はヨーロッパで好評を博したため、注文で長期にわたって製作されたとみられる。輸出品のためか中国国内での出土例はあまり見ないが、江西省広昌県の墓などから出土することが報告されている。生産地に近いことなど特殊な例かもしれない。紀年墓出土例であり、主に万暦36年(1608)から南明弘光元年(1645)にかけての芙蓉手皿が示されている⁽²³⁾。13の年代は1590~1630年代。14は17世紀前半。図15は口径40cmを越すような芙蓉手大皿片。見込にも緻密な文様を埋め、周囲にまりばさみ文をめぐらす。内側面は区画に窓絵を配す。外側面も区画に窓枠を表す。17個体。1590~1610年代。日本での類例は平戸和蘭商館跡など少ない。図16は染付大皿。芙蓉手の一種で内側面の区画内にチューリップデザインを施すタイプとみられる。特徴の一つは見込周囲に文様帯を設け、菊文を独特の表現の葉と共に描く。側面の文様はチューリップ文の区画部分は残らないが、それと交互に配した唐人風景図の区画の一部とみられ、土坡に草を描く。見込部は欄干など建造物の一部とみられ、これもチューリップデザインの芙蓉手大皿に一般的な構成文様である。3個体。チューリップデザインの大皿の意匠はかなりの種類があり、この陶片にもっとも似通っているのはトルコ・トプカプ宮殿収蔵品 No. 1609の大皿である。口径48cmである。日本での出土例は別のタイプのチューリップデザイン大皿片であり、長崎・出島和蘭商館跡などに少量みられる⁽²⁵⁾。17世紀第2四半期。図17は白磁猪口。高台内に二重方形枠内に「大明成化年製」の二行6字銘を染付する。1個体。類品は長崎・平戸和蘭商館跡の1616年頃の海岸石垣築造に伴う造成土から出土している⁽²⁶⁾。1600~10年代とみられる。二重方形枠内の「大明成化年製」銘は大阪市住友銅吹所跡出土品にもある⁽²⁷⁾。伝世品では永青文庫所蔵「豆彩団龍文杯」にみられ、清・雍正期とされる。図版1-5は染付釉裏紅碗。見込に菊文を染付と釉裏紅で表す。1個体。17世紀前半。こうした染付と釉裏紅で文様を表したものは17世紀前半に多くみられ、日本で出土するこの装飾法の景德鎮磁器のほとんどがこの時期のものである。図18は染付合子の蓋。上面に雲鶴文、側面につる草文を描く。1個体。16世紀後半~17世紀前半。図19は染付合子の蓋。上面に玉取獅子文を描く。4個体出土。17世紀前半。図20~22は褐釉白花合子。20は小型の合子の蓋であり、上面に褐釉の上に白土で花卉文を描き、側面には縦筋を篋彫で陰刻する。3個体。21・22は大型の合子の蓋と身であり、側面に縦筋を篋彫した素地に褐釉を掛け、口縁下に唐草文を白花で表す。21は6個体、22は3個体。16世紀末~17世紀前半。

IV期

図23は染付碗。見込と外面に菊唐草文を描く。外面腰部に蓮弁文帯をめぐらす。144個体。類品はインドネシア・ティルタヤサ離宮跡出土品にみられる⁽²⁹⁾。この離宮は1670~80年代の短期間の離宮であった。図版1-6は染付陰刻文皿。内面に篋彫文を施した素地に見込周囲と口縁部に四方禪文帯、窓絵草花文を染付する。84個体。こうした装飾の景德鎮磁器は康熙頃(1662~1722)に皿鉢類や壺瓶類に多くみられる。17世紀第4四半期~18世紀第1四半期。図24は図版1-6と同様の装飾を施した鉢。見込に花文、外側面に篋彫で花文様を陰刻する。口縁部内外と見込周囲に七宝繋ぎ文帯を染



第2图 中国磁器(2)

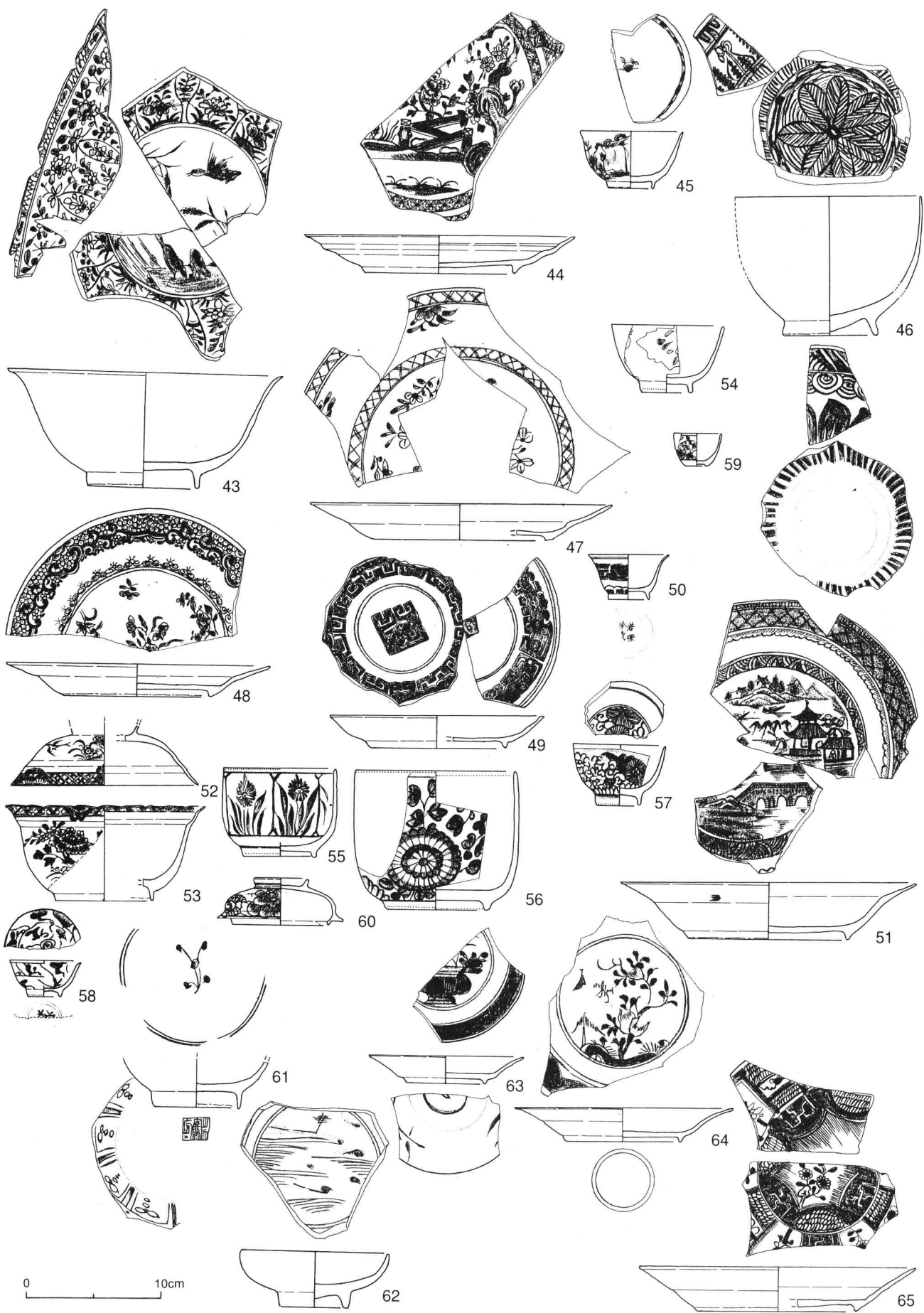
付する。10個体。17世紀末～18世紀第1四半期。図版1-7は緑釉陰刻文鉢。外面に図24と同様の花文を範彫した素地に緑釉を施す。1個体。17世紀後半～18世紀初。図版1-8は三彩染付碗。外面に緑・黄・紫・白の釉を掛け分け、内面は如意頭を連ねた唐花文を見込に描く。内側面は唐草文とみられる。高台内は透明釉を掛ける。79個体。17世紀後半～18世紀初。図版1-9は三彩碗。高台内以外に緑・黄・紫・白に塗り分けた三彩。高台内は二重染付圏線を施す。94個体。17世紀後半～18世紀前半。図版1-10は三彩合子。蓋と身であり、緑・黄・紫・白に塗り分けた三彩。蓋が7個体、身が5個体。17世紀後半～18世紀前半。図版1-11は三彩鉢(?)。線彫を施した素地に紫釉を主とし、線彫部分に緑・黄を塗り分ける。高台内は染付二重圏線を施す。3個体。17世紀後半～18世紀前半。図版1-12は色釉を施した人形類。瑠璃釉、銹釉の人物像、緑釉の鳥形?置物などがある。この種の人形は康熙頃に多くみられる。こうした人形類は6個体。図版1-13は色絵大皿。高台を二重に作るのが特徴である。内面に明るい緑や黄などの色絵具で花文様を描く。7個体。同類がテイルタヤサ離宮跡で出土しており、17世紀後半とみられる。図版2-1は染付素地に色絵を施した大皿。内面に染付で松と竹を描き、その素地に赤で加彩したもの。6個体。17世紀後半～18世紀初。図版2-2～4は染付芙蓉手皿。明末の芙蓉手皿に倣ったもの。見込はまりばさみ文のなかに花などを描く。内側面は区画内に花卉文、宝文を交互に描く。2は高台内に二重方形枠銘を染付する。3は高台内に二重圏線を染付する。25個体。17世紀後半頃。図版2-5は褐釉染付小皿。外側面に褐釉を施す。内面は花、如意頭繋ぎ文帯を中心に花卉文を染付する。2個体。17世紀後半～18世紀前半。図版2-6は染付小鉢。型で捻花に作り、それに合わせて染付で区画をし、草花などを描き込む。見込には花文を配す。高台内にも小花文を染付する。12個体。17世紀末～18世紀前半。図版2-7は褐釉染付小坏。外面に褐釉を掛け、見込に染付で花籠文を表す。高台内に「聚玉堂製」銘を染付する。6個体。少し違うが同類と思われる「聚慶堂製」銘は中国にあるが一般的でない⁽³⁰⁾。見込花籠文の褐釉染付小坏はこの時期の輸出用に多く、見込花籠文を施した小坏はこの時期の肥前磁器で写した例がみられる。図版2-8は染付皿。見込には文字の周りに如意頭繋ぎ文をめぐらし、内側面には寿字文を二段に連ねる。外側面にも寿字文をめぐらす。高台内には二重方形枠内に渦状文を表した銘を記す。1個体。17世紀第4四半期～18世紀前半。図25は深めの染付皿。見込に花(?)文、内側面に折枝文を描く。高台内に方形枠の銘が染付される。2個体。17世紀後半。図26は深めの褐釉染付皿。見込は鳳凰文か。12個体。17世紀後半～18世紀前半。図27は褐釉染付碗。内面に牡丹唐草文、口縁部に七宝繋ぎ文を染付し、高台内に四弁花文を描く。45個体。17世紀後半～18世紀初。図28・29は染付小坏。28は見込に花文、29は外面に魚文などを染付する。高台内に方形枠内銘を染付する。28が6個体、29が130個体。17世紀後半～18世紀前半。図30は染付小碗。外面に花唐草文。見込に草花文、高台内に宝文を銘として染付する。1個体。17世紀後半～18世紀初。図31は染付小坏。外面に菊文、見込水鳥文を染付する。1個体。17世紀中葉～末。図32は染付小坏。内外に不明瞭な文様が染付される。1690年代頃沈没とみられる中国ジャンク船ブントウカーゴ引揚げ品に類品があり⁽³¹⁾、それを見ると見込文は崩れているが、跳魚図とみられる。外面には三星のような文様と馬を描いており、32の外面の点状文は三星の部分かと思われる。32個体。17世紀後半～18世紀前半。図33は褐釉染付小坏。外面に褐釉を施し、内面は染付文様を描く。見込と内側面に草花、口縁部に波濤文から変化したとみられる文様を配す。こうした文様と内側面の草花の組み合わせはブントウカーゴ引

揚げ品と似通っている。⁽³²⁾ 1個体。17世紀第4四半期～18世紀前半。図34は染付小坏。側面に型成形で蓮弁形の陽刻を施す。それに合わせて外面に蓮弁形の区画を描き、中に草花を染付する。上部に花唐草文をめぐらす。見込に松文、内面口縁部に図33と同様の波濤文から変化したとみられる文様を描く。口鏤を施す。このように陽刻で蓮弁形を表し、それに従って染付で枠を描くのはブタウカーゴ引揚げ品⁽³³⁾にもみられる。ブタウカーゴ引揚げ品では亀甲繋ぎ文になっており、本例も下を切った状態だが、亀甲繋ぎ文様の変化したものかもしれない。9個体。17世紀末～18世紀前半。図35は褐釉色絵の小坏。外面に褐釉を施し、口鏤を塗った素地に、内面に赤で牡丹と思われる草花を描く。86個体。17世紀第4四半期～18世紀前半。図36は染付小皿。外側面に縦筋を陰刻し、見込に梅樹、内側面に簡略化した花唐草を区画内に描く。図34のソーサーの可能性がある。12個体。17世紀第4四半期～18世紀前半。図37は褐釉染付小皿。外面に褐釉を施し、見込に花卉、内側面は区画内に山水と花卉を交互に描く。463個体。17世紀第4四半期～18世紀前半。図38は褐釉染付皿。外面に褐釉を施し、内面にいくつかの草花文を描き、口縁部に四方禪文の崩れとみられる斜格子文を染付する。33個体。17世紀第4四半期～18世紀前半。図39は褐釉染付皿。外面に褐釉を施し、内面に渦のなかに巻貝と梅花文を染付する。高台内に四弁花文を染付銘として入れる。図27の碗の銘に似通っており、同じ頃の製作年代と推測される。南シナ海の沈船（ハッチャー・ジャンク）引揚げ資料の中に似通った渦文に梅花を散らした皿がある。⁽³⁴⁾ 見込中央は巻貝でなく馬である。図39より先行するものとみられる。この沈船は癸未（崇禎16年・1643）銘の染付壺蓋を伴うため、1643年頃の一括資料と推測される。6個体。17世紀後半～18世紀初。図40は染付折縁皿。底部は碁笥底状に内側のみ削り込む。こうした底部はオランダのプロングが磁器注文のために1743年に製作した原画にもあるようにヨーロッパからの注文によるのであろう。⁽³⁵⁾ 輸出向けに多くみられる。こうした折縁の平たいプレートはヨーロッパの食卓の器として主要なものであったとみられる。口鏤を施す。口縁部に竹と葡萄文を描く。トプカプ宮殿収蔵品 No.2439の皿に類似している。69個体。18世紀前半。図41は染付大皿。口鏤を施し、内面に花唐草文を描く。独特の花文であり、類品はトプカプ宮殿収蔵品 No.2054にある。184個体。17世紀後半～18世紀初。図42は染付鉢。型に当てて輪花に作る。見込中央に蟹を配し、周囲に水草を描き、内側面は水草の中に魚を描く。類品はトプカプ宮殿収蔵品 No.2203にある。9個体。17世紀後半～18世紀初。図43は褐釉染付鉢。外面に褐釉を施す。見込に葦雁文、内側面は花卉文で埋める。16個体。17世紀後半～18世紀前半。

V期

図44は染付皿。見込に太湖石に牡丹や樹木・欄干など中国の庭園を表し、内側面は四方禪文帯をめぐらし、口縁部にも幾何学文様などでヨーロッパ向けに作られたボーダーを描く。92個体。17世紀末～18世紀中葉。図45は染付小坏。外面に山水、見込に水に岩と思われる文様を染付する。86個体。18世紀。図46は染付鉢。外面下部に蓮弁文帯、口縁部に渦文帯などをめぐらす。見込は花か葉をデフォルメした文様を描き、口縁部にも蓮弁の変化した文様帯をめぐらす。タイのロブブリ遺跡⁽³⁶⁾で同様の鉢が出土しており、インドネシアでも類似のものがみられる。⁽³⁷⁾ 61個体。17世紀末～18世紀中葉。図47・48は染付折縁皿。底部は内側だけを削り込む。47は見込と内側面に花卉文を散らし、見込周囲と口縁部に斜格子文帯をめぐらす。337個体。18世紀。48は見込に花卉文を散らし、見込周囲に如意頭もしくは日本で輪宝文と呼ぶ文様の連続文をめぐらし、口縁部にはヨーロッパで好ま

れるボーダーを細かく描く。似通ったデザインの例はトブカブ宮殿収蔵品 No. 2595があり、1750～70年頃とする。1個体。18世紀。図49は染付皿。見込と内側面に青銅器の意匠から取ったと思われる文様を描く。61個体。18世紀中葉～末。図50は染付小坏。図49と同様の意匠を外面に描く。高台内には「若深珍藏」銘を染付する。42個体。18世紀中葉～末。図51は染付折縁皿。いわゆるウィロウパターン（ウィロウ）の意匠である。見込は柳を中央に配した中国風景を描き、周囲に青海波文帯、内側面に波濤文帯、口縁部に幾何学文帯を描き込む。この意匠もヨーロッパ向けの代表的な意匠の一つである。底部にハリ支えの痕がみられるが、肥前・有田磁器にみられるハリ支え痕に倣ったものと思われる。中国磁器でもヨーロッパ向けの中にくらか見られるものである。149個体。18世紀中葉～末。図52・53は染付蓋付鉢。52は蓋であり、外面主文は草花と鳥を描く。口縁部に四方禰文帯の中に花かと思われる文様を配す。この口縁部文様は図43の皿と同様とみられる。同類品は25個体。53は身であり、外面主文は草花を描く。口縁部外面は蓋と同様であるが、内面にも四方禰文帯を描く。類似器形の小さいものはトブカブ宮殿収蔵品 No. 2641にあり、1750～80年頃とする。14個体。18世紀。図54は褐釉色絵小碗。褐釉を内外に施し、外面に葡萄の葉とされる葉形の窓を透明釉で表した素地に色絵を施す。色は剥落したり変色しているため、原状は明らかでないが、トブカブ宮殿収蔵品 No. 3313などをみると、窓の部分には粉彩で草花などを表したものとみられる。トブカブ例は褐釉地に金彩を施す。類品はロブプリ遺跡出土品にある。64個体。18世紀。図版2-9は染付皿。見込に花つる草文、内側面に区画内に草花を描く。類品はロブプリ遺跡で出土しており、トブカブ宮殿収蔵品 No. 2208のカップとソーサーがある。74個体。17世紀末～18世紀中葉。図55は図版2-9と同様の意匠の蓋付鉢。外面に区画内に独特の草花を描く。類品はトブカブ宮殿収蔵品 No. 2193がある。4個体。17世紀末～18世紀中葉。図版2-10は染付双耳付蓋付鉢。ヨーロッパからの注文による器形であろう。同様の器形の色絵の例はポルトガルにある。⁽³⁸⁾ヨーロッパ陶器にもみられる。⁽³⁹⁾外面に松などを描いた中国の庭園を表す。17個体。17世紀末～18世紀前半。図版2-11は染付皿。見込に柳山水文を描く。172個体。17世紀末～18世紀前半。図版2-12は染付皿か鉢。見込は饅頭心状にふくらみ、底部は碁筈底形に作る。見込は十字花文、周囲に如意頭繋ぎ文帯などをめぐらす。この意匠の崩れたタイプはロブプリ遺跡出土品にみられる。1個体。18世紀。図56は染付蓋付鉢。外面に菊唐草を描く。口唇部は無釉。この種の文様の蓋がトブカブ宮殿収蔵品 (No. 2198) などにある。151個体。17世紀末～18世紀前半。図57は染付小坏。外面と見込には花唐草を描く。類品はタイ・ロブプリ遺跡出土品にあり、また1763年没の伝売茶翁用品にある。⁽⁴⁰⁾日本でも遺跡出土例は沖縄や長崎中心に少なくない。9個体。図58は染付小坏。内外に仙芝祝寿文を描く。この意匠の小坏や小碗などは沖縄や長崎などを中心に比較的多く出土している。そのため肥前磁器も18世紀からこの意匠の碗皿を作ったし、瀬戸美濃系の磁器なども19世紀にこの意匠の染付をたくさん作る。高台内に染付銘を施す。25個体。18世紀後半～19世紀初。図59は染付小坏。底部を碁筈底形に削る。外面に花唐草を描く。極めて小さく、日本では沖縄で比較的多くみられ、沖縄の壺屋焼がそれを模した陶器を18世紀から19世紀頃にかけて作っている。おそらく泡盛など強い酒を飲むのに使ったとみられる。バンテンでの用法はわからないが出土量は多くはない。2個体。18世紀後半～19世紀前半。図60は染付蓋。外面に花唐草を線書きのみで描く。類品はタイ・ロブプリ遺跡で出土し、トブカブ宮殿収蔵品 No. 2394にあり、1720-50年頃とする。15個体。18世紀後半頃。図版2-13は色絵碗。外面に



第3图 中国磁器(3)

染付文様を施した素地に赤で加彩している。ヨーロッパへの輸出向けの装飾であり、ヨーロッパではチャイニーズイマリと呼ばれる。61個体。17世紀末～18世紀前半。図版2-14は色絵蓋。外面に菊花と草花を染付に赤・緑・黄で表す。トプカブ宮殿収蔵品 No.2977の砂糖入れの蓋に比較的似ている。1700～25年頃とする。こうした菊花を描いたチャイニーズイマリは鉢や皿など少なくない。有田の金襴手様式にあるので、有田磁器が本歌となったものと思われる。1個体。18世紀前半。図版2-15は色絵皿。内面に赤のみで花唐草を描く。50個体。18世紀。図版3-1・2は色絵蓋付鉢の蓋と身。文様が違うのでセットではないが、外面に花唐草を色絵具で表す。1はトプカブ宮殿収蔵品 No.2871に類似。1710～40年頃とする。2は21個体。これらは18世紀前半～中葉。図版3-3は色絵塩入れ。粉彩⁽⁴¹⁾で内外に花文様を施す。こうした塩入れはヨーロッパのサービスセットの一つであり、18世紀にみられる器種である。2個体。18世紀。図版3-4は色絵小坏。粉彩で草花を描く。165個体。18世紀中葉～19世紀初。図版3-5は色絵蓋。鉢の蓋と思われるが、外面に粉彩で草花を表し、高台内に赤で蘭花を描く。53個体。18世紀中葉～19世紀初。図版3-6は色絵碗。コーヒーなどの飲用のカップであろう。外面に帆船を黒絵具中心に表す。帆船文もヨーロッパからの注文で18世紀に多く描かれた。1個体。18世紀。図版3-7は色絵手付碗。こうした手付のカップはポルトガルの例などからもソーサー付のコーヒーカップとみられる。外面に色絵が施される。1個体。18世紀。図版3-8は色絵鉢の蓋。黒絵具で輪宝文や文字⁽⁴¹⁾を描く。1個体。18世紀中葉～19世紀初。図版3-9は色絵碗。外面に赤を吹き付けた地に白抜き窓絵を粉彩で飾り、高台内に「大清乾隆年製」銘を染付する。この種の碗は我が国でも長崎のほか、各地で時折出土する。12個体。18世紀中葉～19世紀初。図版3-10は色絵蓋付鉢の蓋。高台疊付に鉄釉を塗った素地の外面に低火度黄釉で塗り埋める。2個体。17世紀後半～18世紀前半。図版3-11は染付皿。内外に仙芝祝寿文を描き、高台内に二重方形枠内に渦状⁽⁴²⁾の銘を染付する。福建地方の製品の可能性も若干残る。7個体。18世紀。有田でもこの種の文様の皿を18世紀後半に作り出す。図版3-12は白磁蓋。この宝珠形のつまみをもつ独特の器形はタイ向け磁器に多くみられ、ポルトガル例は色絵だが、同様の形状の蓋をもつ⁽⁴²⁾。12個体。18世紀。

Ⅵ期

図61は染付碗。外面腰部に蓮弁文、見込に花卉文を描き、高台内に方形枠内に「大清嘉慶年製」銘を染付する。この意匠の碗も我が国でしばしばみられる。出土例はとくに沖縄に多いが、バンテンでは比較的少ない。4個体。19世紀前半。

その他

図版3-13は景德鎮窯で焼成時に使われたとみられる窯道具。肥前ではハマと呼び中国では「泥餅」などと称す。白い磁器原料を使った板状のものである。肥前ではこうした共土の磁器ハマは1650年代頃から現れるが、肥前のハマと違い片面に成形時の布目痕を残す。日本でも最初に景德鎮のハマであることを確認した長崎でかなり出土例があるほか、大阪・堺市でも出土している。近年佐賀県江北町焼石遺跡⁽⁴³⁾でも1点出土している。出土例はいずれも16世紀末から17世紀前半頃のものとみられる。製品出荷時に熔着した状態で出たものが途中で離脱したものであろう。1個体。

B 福建・広東窯系

福建省南部の徳化・安溪・漳州地方に窯が分布する。徳化窯の白磁を除けば主に景德鎮系磁器より粗製の磁器生産を行った。その流れで広東省北部にも粗製磁器生産の窯がいくらか分布している。この地域の染付生産は景德鎮窯の染付が磁器の主流となっていく中で、16世紀後半から本格的に始まった。そのためバンテンではⅢ期以降に現れる。

Ⅲ期

図版3-14は染付碗。比較的白い土であり、全面に施釉され、高台畳付にボンボンとした敷き砂(モミガラ)の熔着がみられる。外面に花唐草、見込に花卉を描く。日本でも出土例は多く、肥前の胎土目積み段階の陶器と共伴する例が多い。海外でもベトナム・ホイアンでわずかに出土している。197個体。1590~1630年代。漳州窯系。図版3-15は染付小皿。素地の状態や高台の状態は14の碗に近い。見込に旗や塔を描き、緩く折った口縁部内側に四方襷文帯をめぐらす。日本の出土例も少なくないが、ベトナム・ホイアンでも出土している。1個体。1590~1630年代。類品は漳州・詔安県窯でみられる。⁽⁴⁴⁾図版3-16は染付折縁大皿。日本で呉州手(呉須手)、ヨーロッパでスワトウウエアと呼んだもの。見込に鳳凰や竹を描き、口縁部に青海波地に窓絵を配し、窓内に花文を表す。この意匠の皿は我が国でも出土例は多い。またベトナム・ホイアンでもかなり出土している。この種のは化粧掛けした上に呉須で文様を描き、透明釉を施す。371個体。1590~1630年代。漳州窯系。図版3-17は色絵鉢。日本で「呉須赤絵」と呼んだもの。化粧掛けした素地であり、高台付近の施釉は雑であり、粗い敷き砂が熔着する場合もある。そうした粗放な素地に赤中心の色絵具で蓮文などを描く。口縁部には地文と窓絵の文様帯を表す。1個体。1590~1630年代。漳州窯系。図版3-18は染付皿。見込には麒麟かと思われる文様を表す。1個体。1590~1630年代。漳州窯系。図版3-19は白磁稜花形皿。形押し成形によって高台まで作り出したため、底部に粘土皺が見られるのが特徴。見込と高台に胎土目積みの痕がみられる。口縁部を稜花形に刻むが、この種の素地に赤などで色絵を施したものが、大阪市で出土している。また、同様の胎土目積み、⁽⁴⁵⁾型成形の白磁碗が長崎、沖縄などで出土しているが、⁽⁴⁶⁾本遺跡でも14個体分ほど出土している。胎土目積み白磁碗は徳化窯出土例が報告されている。1個体。16世紀末~17世紀前半。徳化窯系。図版4-1は白磁長胴瓶。いわゆる安平壺である。器形は口縁部、底部などを細かく見ればいくつかに分けられるが、ここでは一括して報告する。台湾の安平城に因む名であるが、16世紀末から17世紀にかけて日本から東南アジアにかけて多量に流通したものとみられる。⁽⁴⁸⁾古い例は平戸和蘭商館跡出土品があるが、⁽⁴⁹⁾新しい例は1690年代頃の沈船ブントウカーゴ引揚げ品がある。⁽⁵⁰⁾31個体。

Ⅳ期

図版4-2は青磁大皿。明末の大皿に比べ化粧掛けもせず、高台の作りも異なり、高台周辺は無釉が普通となる。内面に線影の文様を施す。日本ではほとんど出土しないが、東南アジアやトルコ・トプカプ宮殿収蔵品にみられる。133個体。17世紀中葉~末。漳州窯系。図版4-3は色絵大皿。見込を蛇の目釉割ぎした粗製の素地に赤・緑・黄で絵付けする。見込に花卉、蛇の目釉割ぎ部分は緑で塗りつぶし、内側面は区画し草花などを描く。210個体。17世紀中葉~末。漳州窯系。図版4-4は染付大皿。口縁部先端を小さく外に折る。見込を無釉にし、内側面に簡略化した唐草文を軽妙な筆致で描く。日本では見られないが、1661年鄭氏が入って築かれた台湾・左営鳳山県旧城やタイ・⁽⁵¹⁾

ロブブリ遺跡でも類品が出土している。2個体。17世紀後半～18世紀初。図版4-5は染付皿。見込に木の葉と詩句文を描く。類品は台湾・左営鳳山県旧城出土品にあり、漳州朱厓窯や安溪縣安溪窯⁽⁵²⁾などでみられる。鳳山県旧城例は木の葉に「太平年製」の文字を入れるが、木の葉にこの文字を入れた皿は広東・大埔県水尾窯にみられ、報文には「太平年己未□」「太平年庚申□」の文字の記された陶片もあるという。⁽⁵³⁾己未は1679年、庚申は1680年の可能性が高い。57個体。17世紀後半。図版4-6と図62は染付小皿。成形や施文状態が初期伊万里に似通っていることからしばしば誤認された。2は兔山水を描き全釉で高台畳付にモミガラが熔着。台湾・左営鳳山県旧城に類品がある。同類品は13個体。図62は見込に山水文を描く。1690年頃沈没のブタウカーゴ引揚げ品にある。57個体。17世紀後半。図版4-7は染付皿。作行は図版4-6、図62と同様であり、モミガラの熔着がみられる。内面に柳下で拳をしながら酒を飲む中国の民の様子が描かれる。このジャンケン遊びで負けると酒を飲む風俗は景德鎮磁器にも康熙頃（1662～1722）の大皿に描かれた例がトプカブ宮殿収蔵品 No.3248, 3249にあり、また有田磁器でも18世紀初頭の色絵磁器に似通った風俗を描いた例がある。日本では出土例を見ない。14個体。17世紀後半～18世紀初。図版5-1は染付皿。内面を草花で埋める。高台内に二重圏線と銘を染付する。内面の文様は有田・長吉谷窯の例に通じるものがある。長吉谷例は1660年代頃の年代が推測でき、本例も近い年代とみられる。106個体。17世紀後半。図版5-5は白磁合子の蓋。徳化窯白磁の特徴とされる象牙白に属するものと白色のものがある。型を使い、外面に陽刻文様を施す。597個体。17世紀後半～18世紀前半。

V期

図版4-8は染付印判文碗。外面にハンコで染付文様を施す。こうした装飾法を中国では「印青花」と呼び、福建・広東地方の窯で行われた。日本でも沖縄や長崎でかなり出土しているが、大阪・道修町遺跡（享保8年（1723）の大火による火事場整理土坑）で出土している。⁽⁵⁴⁾台湾・左営鳳山県旧城でも出土。53個体。17世紀末～18世紀中葉。図版4-9は染付印判文皿。見込を蛇の目釉剥ぎし、内面に梵字文などをハンコで表す。こうした中・大皿は我が国ではほとんど出土しないが、タイ・ロブブリ遺跡など東南アジアでみられる。50個体。17世紀末～18世紀中葉。図版5-2・3は染付碗。2は口縁部を端反りとする。高台部無釉であり、見込も雑に蛇の目釉剥ぎする。外面と見込に簡略化した文様を染付する。1,232個体。17世紀後半～18世紀前半。3は見込を蛇の目釉剥ぎし、外面に簡略化した唐草文を染付する。同類品は105個体。図版5-4は色絵碗。型押しによって成形し、口禿であるがこれは焼成時に合わせ口で窯詰めしたためである。外面に花唐草文を赤・緑・黄で表す。類品はロブブリ遺跡でみられる。2個体。17世紀後半～18世紀。徳化窯系。図版5-6は色絵小碗。型押しによって成形し、外面に赤・緑で草花を表す。高台内に赤で花文のマークを入れる。75個体。18世紀。徳化窯系。図版5-7・8は散り蓮華。型押しによって成形し、全釉のため、底面には焼成時に敷いたモミガラが熔着。7は白磁であり、8は色絵で花文を描く。1690年頃沈没のブタウカーゴ引揚げ品にも類似のものがみられるから、17世紀末頃から作った可能性がある。7は124個体、8は22個体。18世紀頃を中心とする年代が推定される。徳化窯系。図版5-9・10は染付小碗。型押しによって成形し、口禿が特徴。9は口縁部に丸と点の文様帯、10は窓絵と斜格子地文帯を描く。両者とも、沖縄でたくさん出土するし、東南アジアでは普通にみられる。10は台湾・左営鳳山県旧城出土品やトプカブ宮殿収蔵品 No. 2647にある。10は215個体。18世紀。徳化窯系。⁽⁵⁶⁾

図版5-11は白磁小碗。型押し成形と口禿が特徴。日本では沖縄でもっとも多く出土しているが、他地域でも時折出土している。台湾・左営鳳山県旧城でも出土しており、東南アジアにかけて多量に流通したものとみられる。この素地に青絵具中心の簡単な色絵付したものもある。588個体。18世紀後半～19世紀前半。徳化窯系。図版5-12は染付皿。型押しによる成形と口禿が特徴。見込に竜を染付する。我が国では沖縄、長崎で出土するほかは少ないが、鳳山県旧城をはじめ東南アジアでは多い。1752年沈没のゲルダマルセン引揚げ品にあり⁽⁵⁷⁾、1750年頃とする。245個体。18世紀。徳化窯系。図版5-13は染付碗。外面に寿字と牡丹唐草文を描く。こうした鉢と呼んでもよい大振りの碗は文様の種類は多く、日本でも沖縄で多量に見られるほか、長崎などで少量の出土例がある。鳳山県旧城をはじめ東南アジアには多い。36個体。18世紀。福建南部地方。図版6-1～6は染付皿。1は見込に鶴を描き、高台内に「源裕」銘を染付する。103個体。18世紀。2は見込に唐人文を描き、高台内に「和美」銘を染付する。この種の皿は、日本では沖縄で出土例が多い。30個体。18世紀。3は見込に花唐草文を描き、高台内に「□興」銘を染付する。類品は徳化窯にある⁽⁵⁸⁾。265個体。18世紀。4は見込を花文で埋める。19個体。18世紀。5は見込に竜を描き、高台内に銘を記す。同類品は43個体。18世紀。6は内面から外側面にかけて雲龍文を表し、高台内に銘を記す。類品はトプカプ宮殿収蔵品 No. 2611にあり、こうした雑器がトプカプに渡ったことは興味深い。12個体。18世紀中葉～末。これらは福建南部地方産。図版6-7は染付鉢。外面に花唐草を描く。日本ではあまり見ないが、鳳山県旧城、ベトナム・ホイアン、タイ・ロプブリ遺跡などで多くみられる。20個体。18世紀。

この時期のもので福建南部産か景德鎮窯系か明確にできないものがある。

図版63・64は染付折縁皿。63は口鏤を施し、見込に花箋文を描く。64は見込に仏手柑を描く。63は37個体、64は3個体。17世紀末～18世紀前半。図版65は染付芙蓉手皿。図版2-3などの景德鎮磁器を手本としたもの。233個体。17世紀末～18世紀前半。図版66は染付折縁皿。口鏤を施し、内面に氷裂梅花文を描く。46個体。18世紀。図版67は染付皿。見込に寿字？、内側面に梵字文を連ねる。80個体。18世紀。図版68・69は染付合子。68は蓋であり、草花を描く。同類品は128個体。69は腰部に蓮弁文帯を染付。85個体。17世紀後半～18世紀。図版6-8は白磁碗。高台に鉄釉を塗り、高台内を蛇の目釉剥ぎして窯詰めする。釉に貫入が入るのが特徴。日本ではみられない。35個体。18世紀であろう。

VI期

図版6-9は染付散蓮華。内面に唐草状の文様を描く。日本では沖縄、長崎などで少量出土しており、タイ・ロプブリ遺跡でもみられる。38個体。18世紀後半～19世紀前半。図版6-10は染付碗。外面に花唐草を描く。高台内にも銘を染付する。日本では沖縄にもっとも多いが、他にも少量出土例はある。2個体。19世紀前半～中葉。

(2) 中国陶器 (第4図)

図版6-11は黄釉褐彩水注。外面に貼り付け文を施す。類例は世界陶磁全集図248にあり、貼り付け文は人物である。1個体。9世紀。長沙窯。図73(図版6-12)は三彩耳付壺。低火度釉の陶器であり、外面に唐草文を貼り付け。いわゆるトラディスカントの壺。日本でも少量出土例がある。1個体。16世紀～17世紀。図70・71の緑釉小坏は低火度緑釉を施したものであるが、本来、磁器の可

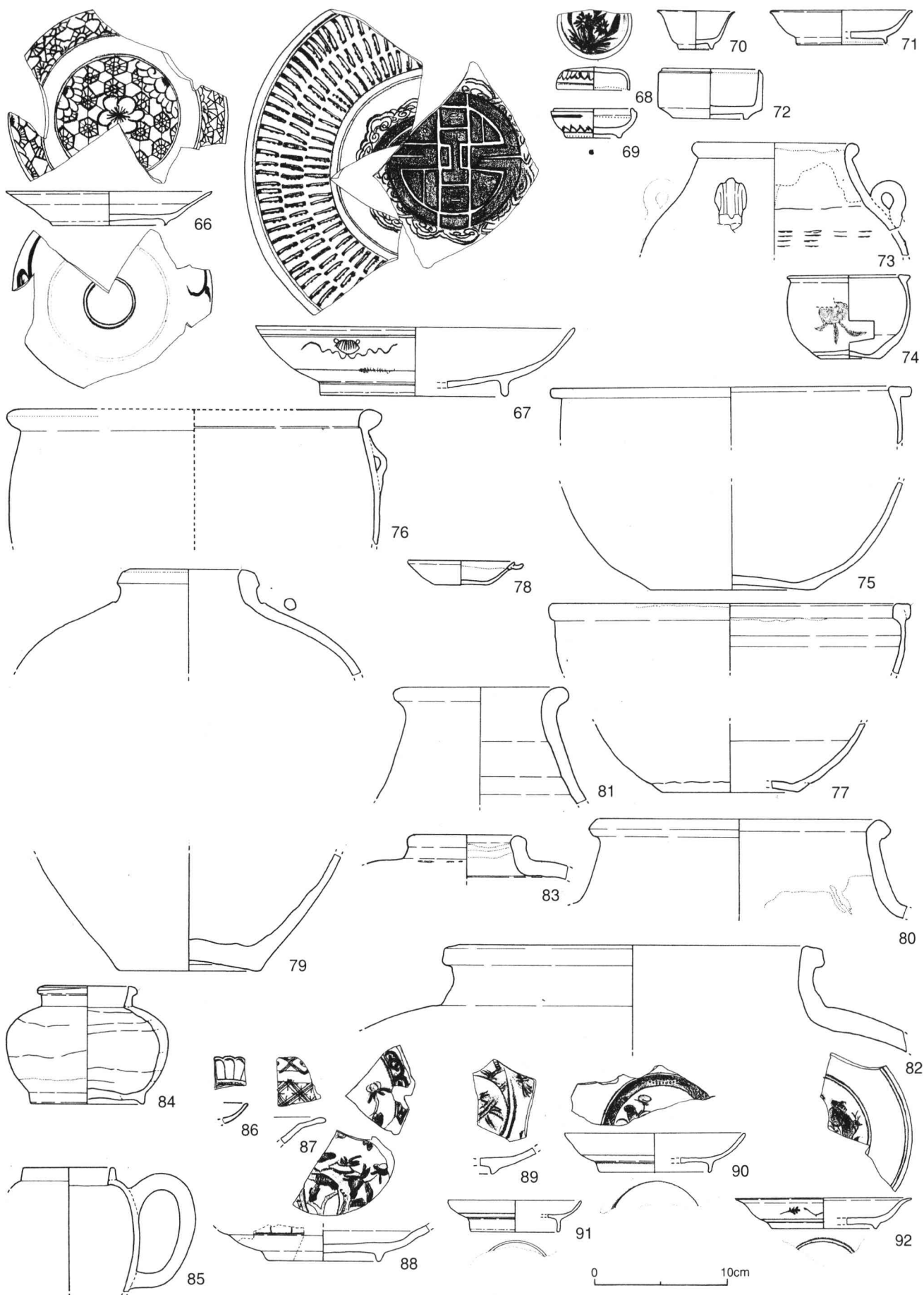
能性がある。70は焼成不良のため、内面は白いが透明釉であろう。焼成不良で軟質に見える緑釉などの合子類はハッチャージャンク（1643-6）にある⁽⁵⁹⁾。22個体。17世紀～18世紀前半。福建省南部産か。図71は内面から外側面に緑釉，高台内は透明釉を施す。25個体。17～18世紀前半。図72は緑釉合子。内面透明釉で磁器である。16個体。17～18世紀。図77は褐釉鉢。内面のみ褐釉を施し，外は露胎で淡褐色を呈す。甕の蓋として作られたとみられる。底部に砂目痕がみられる。類品は台湾・左営鳳山県旧城でみられる。14個体。17世紀。図78は褐釉小皿。内面のみ褐釉を掛け，口縁部は無釉である。口縁外側の一方に小さな舌状の把手を貼り付ける。灯明皿とみられる。1690年沈没のブントウカーゴ引揚げ品にみられるが，これは把手が口縁部内側から貼り付ける点で異なる。鳳山県旧城でも出土しているが，これも内側から貼り付けている。300個体。17世紀～18世紀前半。図75（図版7-1）と図74は褐釉鉄絵鉢。素地は淡褐色の精土であり，光沢の強い褐釉に黒褐色を呈する絵文様を表す。我が国では見ない。口縁部は無釉。7個体。図74は1個体。17～18世紀。図76（図版7-2）は褐釉耳付鉢。淡褐色の素地であり，型で成形し，外面に陽刻文様，内面に粒状の圧痕がみられる。内外に褐釉を施し，口縁部のみ無釉とする。我が国では長崎で出土している程度である。70個体。17～18世紀。図82（図版7-3）は褐釉壺。肩に叩き痕がみられる。1個体出土。17～18世紀。図79は黒褐釉耳付壺。肩に刻印が押されている。内外に鉄釉を施すが，口縁端部と底部は無釉。13個体。16～17世紀。図80は褐釉甕。内面下部は無釉。1個体。16～17世紀。図81は褐釉壺。内面下部は無釉。6個体。17～18世紀。図83は褐釉壺。比較的精土の素地に外面から口縁部内側にかけて褐釉を施す。肩部に焼成時重ね積みした熔着痕がある。1個体。17～18世紀。図84は黒釉小壺。輪積み成形の痕を顕著に残し，高台を作り出す。底部を除き黒釉を施す。口唇部は二次的に擦って露胎としている。1個体。17～18世紀。図版7-5は緑釉植木鉢。素地は精土を用い薄く作る。写真右は丸形であり，型を使って成形する。外面に緑釉を施す。16個体。写真左は角形であり，粘土板を貼り合わせて成形し外面に緑釉を施す。11個体。こうした緑釉陶器は我が国では長崎で出土しているが少ない。17世紀後半～18世紀。図版7-6は無釉の素焼土器の涼炉と台（下）。涼炉は外面に詩句と思われる文字を陰刻している。鳳山県旧城でも出土している。各1個体。18～19世紀。図85は無釉炆器の手付水注。橙褐色の精土を用いて型で成形するのが普通であり，江蘇省の宜興窯で焼造された。本来蓋が付き，飲茶用として作られた。日本では長崎・岩下遺跡で17世紀後半～18世紀初頭の肥前陶磁器と共に出土している。1752年沈没のゲルターマルセン号引揚げ品にあり⁽⁶¹⁾，1750年頃とする。鳳山県旧城にもみられる。いわゆる朱泥であり，この種の宜興窯のティーポットはヨーロッパにも多く渡っており，ドイツのマイセン窯などで模倣された。日本でもこの影響で万古焼などが生れた。10個体。17～19世紀。

（3）肥前磁器（第4～6図）

現在の佐賀・長崎両県にまたがる肥前地方では近世に陶器，磁器が盛んに焼造された。普通，出荷港の名に因んでそれぞれ「唐津焼」「伊万里焼」と呼ばれた。しかし本論では生産地の実態に近い地域名を冠した「肥前陶器」「肥前磁器」と称する。

Ⅲ期

図86は染付手塩皿。口縁部を菊花形に刻み，内側面に菊弁を染付する。同様の手塩皿は佐賀県山



第4图 中国磁器(4), 中国陶器, 肥前磁器(1)

内町窯ノ辻窯でみられる。⁽⁶²⁾国内向けの磁器であり、海外ではバンテンの出土例のみである。2個体。1630～40年代。1989年の調査でこの出土品を発見したが、これにより肥前磁器の海外輸出は1640年代に遡る可能性が確定的となった。

IV期

図87・88は染付皿。87は口縁部上面を曲面に作り、そこに木目状の文様を表す。内側面に四方襷文を描く。この種の曲面状の口縁部に木目状文様を描く中皿は、1640年代頃に山辺田3号窯、猿川窯などいくつかの窯で出土している。⁽⁶³⁾やはり輸出用ではなく、海外ではバンテンのみで出土している。1個体。88は見込に岩牡丹文を描き、周囲に如意頭繋ぎ文を染付する。類品は丸尾窯などでみられる。⁽⁶⁴⁾2個体。1640年代頃。図93、図版7-8は色絵大皿。白磁素地の見込に菊を描く。区画文を表した口縁部の陶片が同一個体の確証はないが、素地の状態などからその可能性が高いので一緒に図示した。外側面に唐草文、高台内に二重方形枠内の銘（「福」字であろう）を色絵で表す。色絵は緑・黄・紫・黒線などを用い、赤は使わない。外面文様の特徴からも初期色絵の中期に属する大皿とみられる。2個体かと推定される。1650年代頃。図89は色絵中・大皿。赤の圏線で区画した見込に緑・黒線などで仙境図を描き、内側面に赤の印判文と緑の円形内に山水文（仙境図か）を描く。素地の釉は充分溶けておらず、有田との違いが認められる。意匠は印判手仙境図という中国の呉州赤絵に見られるものであり、17世紀には佐賀県嬉野町吉田窯でのみみられる意匠である。⁽⁶⁵⁾ジャカルタのパサール・イカン遺跡出土品のなかに初めて発見したが、バンテンでもかなりみられ、インドネシアで多く出土している。我が国でも少量出土例がみられるが、現在のところインドネシアで一番多く見られるため、輸出向けに作られたものと推測される。18個体。1650～60年代。図版7-7は染付碗。見込に波間に鯉が跳ねる荒磯文を表す。このタイプは外面に雲龍もしくは雲龍鳳を描き、内側面に魚文を三方に配すものが基本である。より大振りの鉢形の場合、口縁部内側に雷文帯などの文様帯を描くのが普通である。見込の荒磯文が、鯉の代わりに龍頭を描くものなどもある。この荒磯文碗は明末の中国磁器を手本に作られ、主に東南アジア向けに一時期肥前帯で大量生産された。図90・91は染付皿。90は見込に牡丹と思われる草花を描き、周囲に墨弾きによる花文を配した帯文をめぐる。こうした装飾、器形の特徴は有田の長吉谷窯、柿右衛門窯出土品に共通するものがあり、同時期の有田産とみられる。1個体。1655～70年代。91は高台を高く削り出した皿であり、高台内に染付二重圏線を施す。この破片では内面部分に文様はないが、他の内面部分に文様を施している可能性が高い。1個体。1660～90年代。有田産。図92・94・95は染付端反皿。92は見込に岩などを描き外側面に折枝文、高台内に二重圏線を染付する。44個体。1670～90年代。94は口縁部を輪花に刻む。見込に五弁花、内側面に唐草文、外側面に唐草文を染付する。五弁花文は、1690年代以降画一化し流行する五弁花の表現とは異なるので、五弁花の出現期の一つとみられる。2個体。1680～90年代。95は見込に草花と思われる文様を描き、内側面に渦に梅花、外側面に唐草文を染付する。1個体。1680～1700年代。以上は有田産。図版7-10・11は型打成形によって輪花に作る染付皿。10は口鏤を施し、見込に蟹を描き、内側面は区画内に花鳥文などを描く。外側面に唐草文、高台内に渦福字銘を染付する。銘の周囲にハリ支え跡が2カ所以上ある。南川原窯ノ辻窯産とみられる。蟹文を主文に描くことは肥前磁器では稀であるが、バンテンでは明末の景德鎮磁器にもみられ、注文もしくは意図的に選んで輸入した可能性もある。6個体。1680～1700年代。11は口縁部の

小片であるが、特徴的な意匠であり、類品はオランダ・ハーグ市立美術館所蔵「染付帆船図変形皿」(長径16cm)であり、イギリスのパーレイハウス所蔵品にもあり、ヨーロッパから意匠まで注文を受けて有田で作ったとみられる。ハーグの伝世品をみると、見込にオランダの陶画家ファン・フライトムの作品に見られるような様式の図が描かれる。1個体。1690年代頃。図96は白磁三足皿。型を使い口縁部を花卉か葉をかたどった形状に作る。底部は円形に無釉とし、磁製のチャツのような窯道具を当てて窯詰めする。足は猿面のようなものである。型押しで表し、それを貼り付ける。類例は見ないが猿面の足は青磁三足皿の足として17世紀中葉に見られるものに近い。1個体。17世紀後半。有田産。図97は色絵小皿。型打成形によって輪花に作る白磁素地の内面に草花を赤・緑などで表し、外面は赤で圏線を引く。1個体。1660～90年代。有田産。図98は色絵折縁皿。白磁素地の見込周囲に赤で二重圏線を引き、内側面に花唐草を赤・緑?で表し、口縁部に蓮弁文帯を赤で描く。外面は赤で圏線を引く。5個体。1655～80年代。有田産。図99は染付芙蓉手皿。見込周囲にまりばさみ文を描く。明末の中国磁器を手本としたものであり、輸出向けに肥前で大量生産された。48個体。1660～90年代。図100は染付芙蓉手大皿。見込に花鳥文を描く。3個体。1660～80年代。図101は色絵芙蓉手大皿。白磁素地の見込周囲にまりばさみ文、外面には折枝文を赤・緑・黄・黒線などで描くが、赤以外は変色している。1個体。1660～70年代。有田産。図102・103は染付大皿。口縁部を輪花に刻んだ素地の見込に花盆文、内側面に草などを描く。外側面に唐草文を染付。高台内にハリ支え痕が残る。こうした花盆文は輸出向けに盛んに描かれた。3個体。1680～1710年代。103は型打成形によって口縁部を輪花に作る。見込に岩に梅樹、内側面を区画し、梅や草花を表す。外側面に折枝文を染付。口唇部に呉須を塗るのも特徴。55個体。1670～90年代。有田産。図版7-9は青磁皿。高台内を蛇の目釉割ぎし、鉄漿を塗る。この部分にチャツの熔着痕がみられる。内面に篋彫で植物文様?を施す。こうした青磁大皿は海外ではインドネシアで出土するほか、トルコで伝世品が2点確認される。⁽⁶⁷⁾10個体。17世紀後半。波佐見窯産。図109は染付碗。見込に初期的な五弁花文、外面に山水文、高台内に「大明年製」銘を染付する。1個体。1670～80年代。有田産。図110～112は色絵合子。110は蓋であり、白磁素地の上面に草花、側面につる草などを赤・緑・黄?などで描く。14個体。111は身であり、文様の有無は不明。35個体。112は外面に文様を施すが不鮮明。34個体。1655～80年代。有田産。こうした合子は我が国でも出土するが、インドネシアでの出土の割合は多い。中国磁器、ベトナム陶器なども加えると多量である。これは主にこの地域で流行ったビンロウ嚙みの石灰入れとして需要が多かったという。図113は染付八角蓋付鉢。型押成形によって八角に作られ、外面に陰刻文様を施す。文様は紗綾形地文と柴束文を交互の面に陰刻し、その上から濃み筆で呉須を塗って文様を浮かび上がらせる。元禄頃に有田で多く行われた装飾法である。2個体。1690～1700年代。有田産。図115は染付手付水注。この種の器形の水注は1660～80年代にかけてヨーロッパ向けに作られた。ヨーロッパでは金属のワンタッチ開閉式蓋を取り付けて用いた。胴部に草花、その上下に月桂樹の帯と濃みの帯をめぐらす。1個体。1660～70年代。有田産。図116も染付手付水注。胴部主文は三方の区画内に山水文を描き、口縁部には如意頭文をめぐらす。類品はヨーロッパで1689年銘の銀蓋が付く。⁽⁶⁸⁾伝世品は少なくない。⁽⁶⁹⁾1個体。1670～80年代。有田産。図114は染付蓋付大鉢。外面を区画して上部は牡丹唐草、側面は岩梅を描く。こうした大型の蓋付鉢は輸出向けに作られたものとみられ、ヨーロッパに伝世品が少なくない。⁽⁷⁰⁾蓋付鉢という意味での同

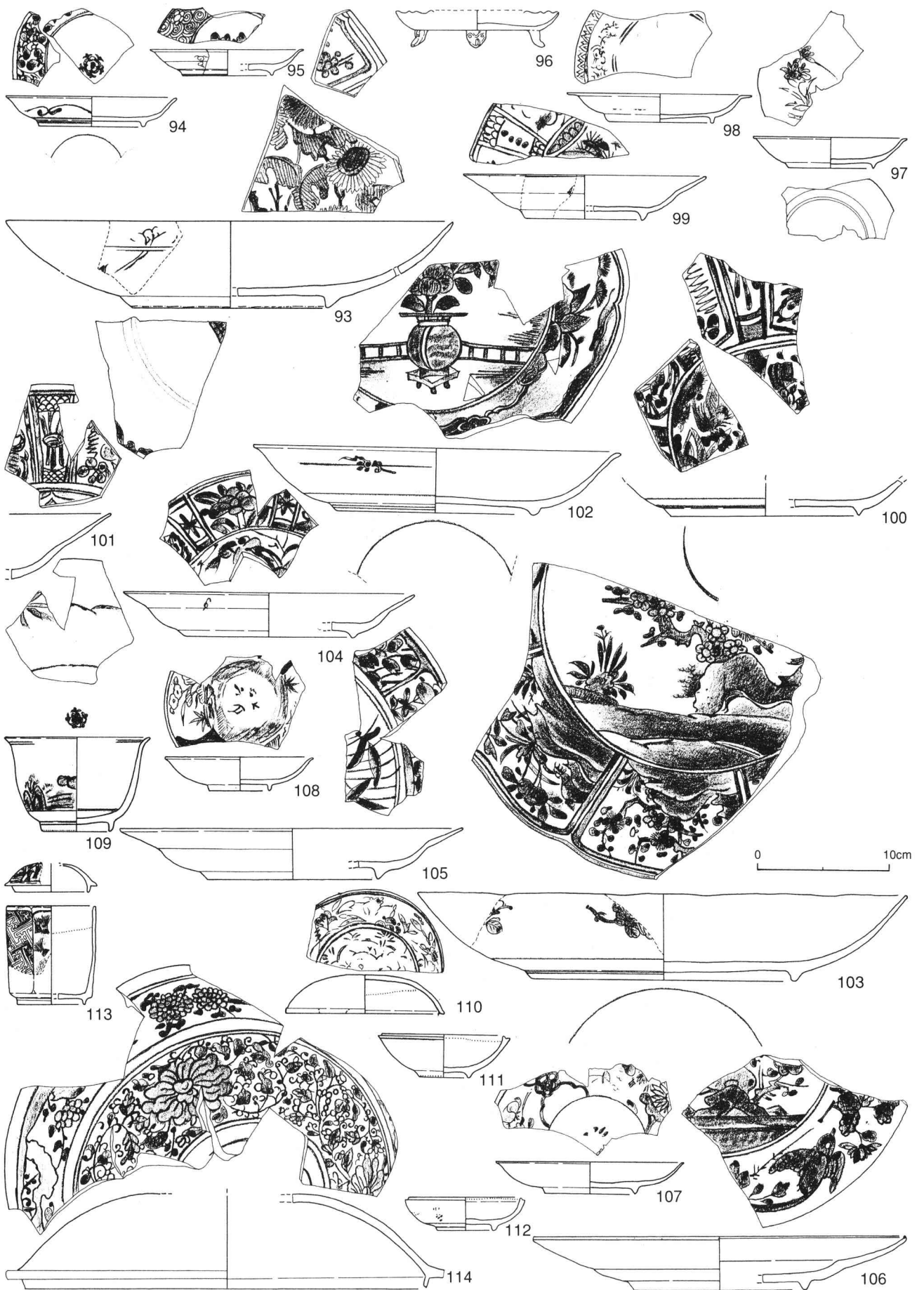
類品は92個体。1660～18世紀初。有田産。

V期

図104は染付芙蓉手皿。口鏤を施し、見込に果木文を描き、内側面は区画内に花卉文と宝文を描き込む。区画内や区画間の文様表現も中国磁器を手本とした芙蓉手意匠からは変化している。類例はパサール・イカン遺跡やジャカルタの進藤コレクションにあり⁽⁷¹⁾、国内では長崎出島で出土している⁽⁷²⁾。有田・稗古場窯などでみられる⁽⁷³⁾。7個体。1690～1740年代。図105は染付芙蓉手皿。芙蓉手の特徴である内側面文様は中国の芙蓉手意匠とは著しく異なる。内側面の大きい区画内には牡丹、菊、果木を6方に配す。その区画間には花卉文を描く。見込は花盆文と思われる文様が描かれる。類品は進藤コレクションにある⁽⁷⁴⁾。4個体。1700～40年代。有田産。図106は染付髭皿。口縁部端部を上方に小さく立てているところから髭皿といえる。見込に岩に梅を描く。折縁部に花鳥文を染付している。髭皿は中国磁器の例は比較的少なく、肥前有田磁器が主である。年代的には18世紀前半の金襴手様式の髭皿が多い⁽⁷⁵⁾。1752年沈没のゲルゲーマルセン引揚げ品に金襴手様式の色絵花盆文髭皿2点がみられる⁽⁷⁶⁾。バンテン遺跡でも図版8-1のように、少量色絵金襴手髭皿が出土している⁽⁷⁷⁾。肥前で髭皿を作った時代が17世紀末から18世紀とすれば、染付の髭皿は比較的初期に多いと思われる。染付例は長崎出島の例や図106のほか、進藤コレクション、パサール・イカン遺跡例があり⁽⁷⁸⁾、いずれも17世紀末～18世紀初とみられる⁽⁷⁹⁾。図107・108は色絵金襴手様式皿。輸出用のカップの受け皿（ソーサー）である。一部染付を施した素地に赤・金などの色絵具で描く。107は見込に花卉、内側面に草花を表す。108は見込蛇の目釉剥ぎした素地であり、蛇の目釉剥ぎ部分を色絵具で塗りつぶして隠す。中央に花卉、内側面の窓内に草花を描く。こうした色絵のソーサーは国内では長崎や山口県萩城下町遺跡などで少量出土している⁽⁸⁰⁾。海外ではインドネシアで出土しているほか、オランダ・アムステルダムで出土例がある⁽⁸¹⁾。ヨーロッパにおける伝世品は多い。107は284個体。108は41個体。1690～18世紀前半。有田産。図117は染付鏝付鉢。本来、蓋付であり、鏝部上面に牡丹折枝を描き、口縁部に四方襷文帯をめぐらす。平底の底部は無釉。3個体。18世紀前半。有田産。図版8-1は色絵髭皿。型打成形によって口縁部は輪花に作る。見込に花盆文を赤・緑などで表す。

(4) 肥前陶器ほか

図版8-2は砂目積み陶器皿。白色精土を用いた玉子色の陶器であり、嬉野町内野山窯産とみられる。1個体。17世紀前半。図版8-3は鉄釉皿。内側面に線彫で唐草文を陰刻し鉄釉を掛ける。外面下部は畳付を除き鉄漿を塗る。見込と畳付に陶石かすのような白い目跡がみられる。17世紀第2四半期。この他、三島手、刷毛目陶器もあり、合計で7個体。図版8-4は褐釉甕。甕の肩部と底部（写真右）の破片。内面に叩き成形による格子目状の当て具痕がみられる。内外に鉄釉を施す。こうした叩き成形による肥前の甕は海外で初めて確認された。肥前の壺・甕類は初期には青海波状の当て具痕であった。バンテンで細片であるが1点青海波状の叩き痕をもつものがあり、肥前陶器の輸出の年代が遡る可能性も残る。1個体。18世紀か。図版8-5は陶器耳付鍋。外に折った口縁部に耳を貼り付ける。無釉の底部脇に小さな角状の足を貼り付ける。淡褐色の素地に透明釉を施すものと、鉄釉を施すものがある。こうした耳付鍋は関西系の窯で18世紀に作られ、国内では一般的である。海外では南アフリカのケープタウンで出土しており、2ヶ所に共通するのはオランダ勢力が強



第5図 肥前磁器(2)

い点である。16個体。

(5) 南中国かインドシナ半島の陶器 (第6図)

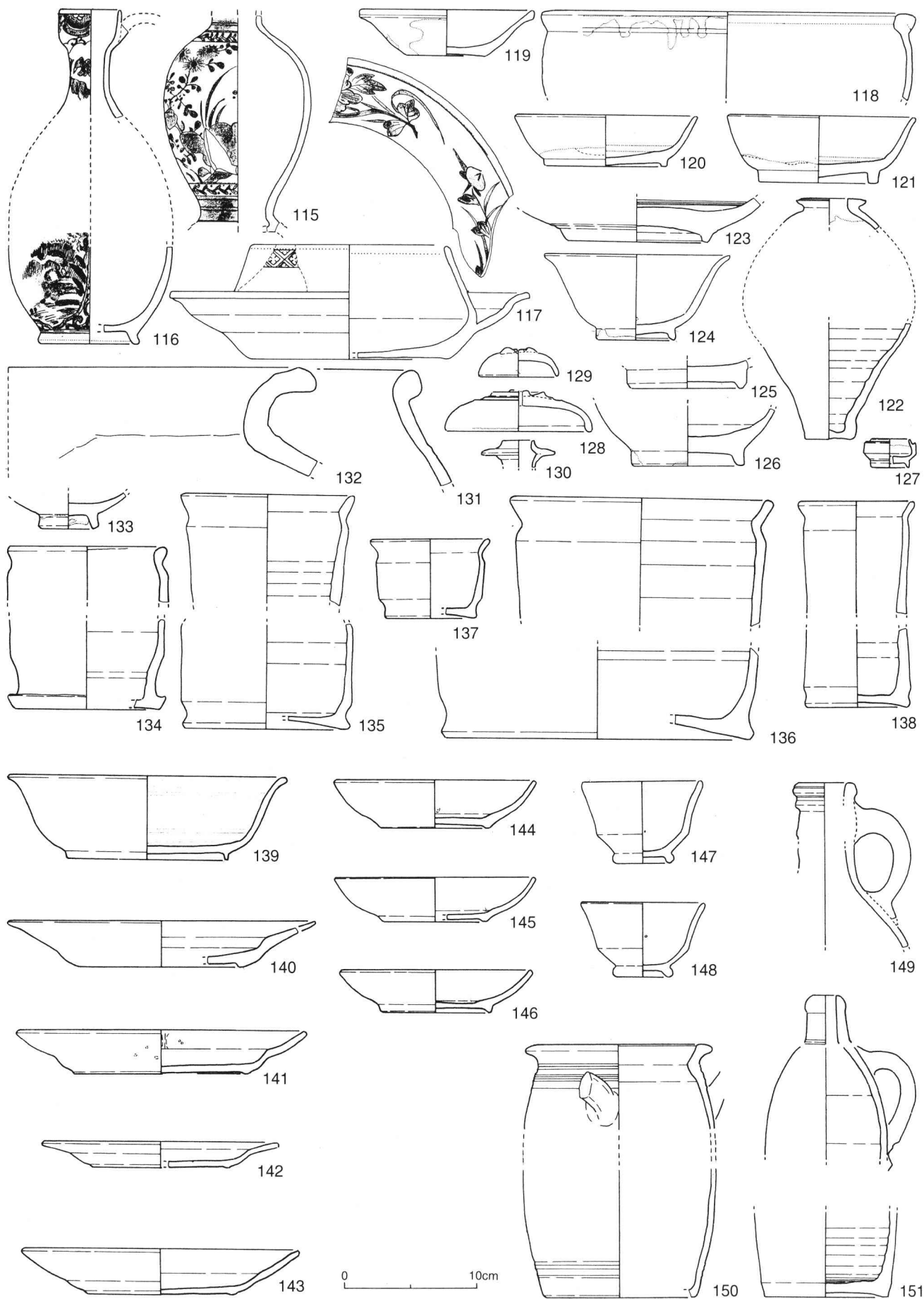
図118は褐釉鉢。内側に掛けた褐釉が口縁部外側まで流れる。口縁部上面は釉をふき取り、焼成時に甕などと合わせ口にして窯詰めする。3個体。16～17世紀。図119は褐釉皿。図78と同様の灯明皿とみられる。底部には右巻の糸切痕が残る。内面に鉄漿を掛ける。27個体。17～18世紀。

(6) ベトナム陶磁器 (第6図)

図版8-6は染付大皿。内側面は唐草、外に折った口縁部には細かい唐草を描く。外側面は蓮弁文を染付する。口唇部は無釉。他に見込に魚文を描いた底部片もある。8個体。15～16世紀。図版8-7は色絵皿。写真中2点は染付を加えた素地に赤・緑・黄で色絵を施す。底部は無釉。1個体以上。15～16世紀。図120(図版8-8)、図121(図版8-9)は鉄絵碗。見込は蛇の目釉剥ぎであり、底部は無釉。120は見込に鉄絵文様を施す。121より胎土が緻密であり、古式とみられる。1個体。17世紀。121は内面に圈線を引き、見込と内側面、外側面に菊花と思われる文様をハンコで押す。66個体。17世紀後半。図版8-10は三彩折縁皿。口縁部は輪花に作り、内面に刻線と色釉により草花を表す。色釉は赤・緑・黄・紫である。陶器であるが高火度の色釉である。この種の三彩は我が国では見ないがジャカルタ国立博物館展示品にあり、また輪花ではないものが、ベトナム陶器として紹介されている⁽⁸²⁾。年代を16～17世紀とするが、技法からみると18世紀頃ではあるまいか。産地についてもベトナムで確認できておらず、中国南部の可能性も考えておきたい。3個体出土。図122は褐釉瓶。いわゆる「南蛮粽花入れ」である。内面下部には巻上げ後の顕著なロクロ成形痕が残る。外面から内面上部に褐釉を施す。日本には花入れとして伝世したものが少なくない⁽⁸³⁾。堺環濠都市遺跡、長崎市栄町遺跡などで出土している。5個体。16～17世紀。図版8-11は焼締陶器壺。肩に二条沈線を2カ所以上めぐらしている。全く同じではないが、線影など比較的似たものはベトナム中部のミースェン遺跡出土品にみられる⁽⁸⁴⁾。出土した中国磁器や肥前磁器から16世紀中葉から17世紀と推測される。1個体出土。図版8-12は無釉焼締陶器水注。急須の把手であり、注口は把手と直角の位置に付く。類品は1690年頃沈没のプンタウカーゴや鳳山県旧城出土品にみられる。日本では売茶翁(1763年没)が用いたと伝えられる伝世品がある⁽⁸⁵⁾。10個体。17～18世紀。

(7) タイ陶器 (第6図)

図版8-13は青磁瓶。線条文を陰刻した肩に環耳を貼り付ける。内面下方は無釉。類例は世界陶磁全集16-75、296にある。3個体。スワンカローク窯。15世紀。図123(図版9-1)は青磁大皿。見込に線影で蓮花文を表し、その周囲に圈線を線影で陰刻する。見込に三叉状の窯道具、高台内に輪状の窯道具の熔着痕がみられる。高台内は無釉。24個体。スワンカローク窯。14～15世紀。図124・125(図版9-2・3)は鉄絵碗。124は見込に足付窯道具の熔着痕がある。6個体。125は高台内輪状に窯道具の熔着痕がみられる。3個体。両方とも、14～15世紀。スコタイ窯。図126(図版9-4)は鉄絵蓋物。高台内に輪状の窯道具の熔着痕がある。図127(図版9-5)は小さな合子の身。外側面に鉄絵を施す。外底部無釉。内面鉄釉。蓋物 合計20個体。15世紀。図128・129(図版9-6・



第6図 肥前磁器(3), 東南アジア陶磁器, イスラム・ヨーロッパ陶器 (120以降の図は, 文様があってもいれていない)

7) は鉄絵合子蓋。内面無釉。合計15個体。15～16世紀。図130 (図版9-8) は鉄絵水注 (クンデイ)。1個体。14～15世紀?。スワンカローク窯。図版9-9は白濁釉鉢。6個体。図131・132は壺甕類。131は焼締四耳壺であり、類品は日本でも堺や九州で出土例は少なくない。22個体。16世紀後半～17世紀前半。シンプル窯。132は大甕の口縁部。11個体。16～17世紀前半と推測される。

(8) ミャンマー陶器

図版9-10のような錫釉とみられる白釉に緑彩を施した大皿などが2個体以上出土している。日本では平戸和蘭商館跡出土例がある。⁽⁸⁶⁾

(9) イスラム陶器 (第6図)

中近東産のイスラム陶器と思われるものが少量出土しているが、図133 (図版9-11) は染付を施した碗。白化粧を施した素地に花唐草文を染付する。高台内外無釉。1個体。トルコ・イズニーク窯か。16～17世紀。

(10) ヨーロッパ陶器 (第6図)

図134～138はアルバレロ形壺。錫釉を施した軟質陶器であり、134 (図版9-12) は錫釉に藍彩で胴部に煙草葉と思われる文様を表す。135～138は錫白釉を施したものであり、大小様々な器形がある。藍彩壺は17個体。白釉壺は136のような大型品は5個体。135のような中型品は14個体。138のような長胴壺は14個体。137のような小型品は12個体ある。オランダ・デルフト窯。17世紀頃。図139 (図版9-13) は藍絵鉢。錫釉に青で線書きし、より薄い水色の顔料で濃みを施す。外面口縁部に窯詰め目跡が1ヶ所残る。2個体。18世紀。オランダ。図版9-14は藍絵タイル。左上は隅の部分であり、タイルの隅文様として多く用いられた花文を描く。左下は帆船を描いた意匠とみられる。17世紀後半か。右下は二重円圏内に風景を描いたもの。17世紀後半か。全てデルフト窯。図140 (図版9-15) は藍絵皿。白釉の上に青顔料で見込に孔雀(?)などを描く。胎土は粗い軟質陶器。畳付の釉は使用によって剥がれている。6個体。18世紀か。オランダ。図141 (図版10-1) は銅版転写染付皿。オリエンタルパターン在意匠を青顔料で表す。他に見込文様が異なり、緑顔料で表したものもあり、高台内に「ORIENTAL」のマークを転写。29個体。オランダ・マーストリヒトのペトゥルス・レグウト窯。図版10-3は銅版転写皿。ウィロウパターン。写真下はオランダ・ペトゥルス・レグウト窯。他はイギリス産。19世紀中葉。図142 (図版10-4) は銅版転写皿。黒絵具による釉下彩。高台内に「□ADAMS」のマークが記される。イギリス産。19世紀後半。図143 (図版10-5) は側面に陽刻文を施した銅版転写皿。側面は陽刻による草花文の上から紫(赤か)、黄、黄緑、水色で彩絵を施す。10個体。同型の白磁皿が別にある。11個体。イギリス産か。19世紀中葉～末。図144 (図版10-8) は色絵皿。内面に緑・青・赤で草花を表す。類例は長崎市上町遺跡出土品にあり、イギリス・アダムス&サーンズ窯とされる。⁽⁸⁷⁾カップ&ソーサーのソーサー。47個体。図145 (図版10-2)、146 (図版10-9) はソーサー。145は青顔料による銅版転写皿。145は底部に「ADAMS & SONS」の銘がみられる。イギリス・アダムス&サーンズ窯。146は白磁皿。高台内に長円形枠内に「P. REGOUT MAASTRICHT (の中に) A = 1836」銘を転写。ペトゥルス

・レグウト窯。図147（図版10-6）、148（図版10-7）はカップ。147は青顔料で Alpine パターンを銅版転写したもの。高台内に146と同様のマークが転写される。148は金彩と思われる加飾を施し、高台内にスフィンクスマークを黒絵具のスタンプで押す。「Petrus Regout & Co. MAASTRICHT」枠下に「MADE IN HOLLAND」を加える。1892年以降、20世紀初め頃か。図149～151（図版10-10～12）は塩釉炆器。149は手付水注であり、いわゆる髭徳利。日本でも長崎や平戸などで出土例がある。40個体。16世紀後半～17世紀。150は耳付壺。青顔料で彩色。13個体。17世紀。151は手付瓶。肩に刻印を施す。29個体。18世紀～19世紀中葉。以上のような塩釉炆器は主にドイツのラインランドで作られた。

まとめ

以上、バンテン出土の陶磁器を時期・産地・種類で分類整理してみると、次のような特徴を指摘できる。

時期的には、別表のとおり、Ⅰ期（15世紀以前）の陶磁器はほとんどなく、あっても中国陶磁とタイ、ベトナムの陶磁であった。

Ⅱ期（16世紀前半～中葉）になると、中国・景德鎮磁器が少量出土するが、全体に占める割合は1%と少ない。

Ⅲ期（16世紀末～17世紀前半）からⅤ期（18世紀）の陶磁器が全体の89%を占め、バンテン王国の歴史を裏付けている。Ⅲ期の中でも1590年代以降の中国磁器が多く、この時期には景德鎮（35%）に加えて福建省南部の磁器が加わり、45%を占めることになる。この頃、オランダ続いてイギリスもアジア貿易に参入した。両者は品質的に上質と粗製品の差があり、つまり价格的に高価と安価の差があったと推測される。すなわち需要者側にもそれまで景德鎮の染付を買って使えなかった階層に、この福建地方の粗製染付が普及していったことで、染付の需要層の幅を拡大したとみられる。碗・小皿や福建・漳州地方の粗製中・大皿の流通に関しては東南アジアから日本で大きな差のない流通を見せている。景德鎮でヨーロッパ向けに多量に作られたとみられる芙蓉手大皿や鉢・瓶などは日本と同様、ヨーロッパなどに比べて少ない。

Ⅳ期（17世紀後半～18世紀初）に日本の肥前磁器が1,017個体と多量に出土することになるのは、1644年以降の明清の王朝交替に伴う内乱が主因である。1683年に台湾鄭氏が降伏して終わるまで、清朝が海上の鄭氏一派に対する経済封鎖のために貿易を禁じたからである。中国磁器の代わりに肥前磁器が東南アジアからヨーロッパにまで運ばれた。1644～84年の間も中国磁器が全く輸出されなかったわけではなく、密貿易によって福建・広東地方などで作られた磁器がわずかな景德鎮磁器と共に東南アジアには流通したものとみられる。しかし、現段階では康熙様式の中で1684年以前のものだけを限定・抽出することは困難である。よって康熙様式の磁器をこの時期のものとしてあげたために、中国磁器の割合が高い比率になっている。ところが実際は1684年以前には中国磁器の割合は肥前磁器より少なかったとみられ、1682年廃絶のティルタヤサ離宮遺跡では肥前磁器の割合の方が多い。つまり1684年の展海令以降、待っていたとばかりに中国磁器の輸出が再開されたと思像できる。ケープタウンの1697年沈没のオランダ船オースターランド号引揚げ品なども中国景德鎮磁器が主体であり、有田磁器はわずかである。1690年代頃のブンタウカーゴ引揚げ品も中国磁器輸出再

開後の好資料である。1684～18世紀初頭におけるバンテン遺跡出土品をみると景德鎮のヨーロッパ向け磁器が増える。その点は肥前磁器も共通である。つまり景德鎮や肥前磁器の場合、東南アジア向けというのが消える。東南アジア向けの磁器生産は主に福建・広東地方が受け持つことになる。景德鎮と有田はヨーロッパ向け磁器を作り、その一部がバンテンでたくさん出土している。

V期（18世紀）になると肥前磁器の割合は3%と大幅に減少するが、18世紀前半までは相当量の出土がみられる。特徴としては東南アジア向けの磁器はほとんど見られず、ヨーロッパ向けの磁器がオランダ船によって運ばれたものと推測される。景德鎮磁器もそうしたものが主体であり、有田磁器と競争する中でヨーロッパ向けに作られたとみられる、いわゆるチャイニーズマリの色絵もアジアでは他に出土例を見ない。景德鎮の特徴的な製品として、褐釉を透明釉などと掛け分けた、褐釉染付や褐釉色絵のカップ&ソーサーなどがある。褐釉地に透明釉で窓を表し、色絵を施したりするものも多い。これらはヨーロッパでバタヴィアンウェアと呼ばれるのであるが、トプカプ宮殿収蔵品にも多いし、ヨーロッパでも多くみられる。いずれにせよ17世紀末から18世紀に多い。器種では、有田や景德鎮がこの時期ヨーロッパなどに多く輸出した大小の壺・花瓶セットなどはバンテンではほとんどみられない。やはり、建物内の壁面を磁器で飾るような趣味は日本同様になかったのであろう。ヨーロッパの天井の高い建築との違いが現れているように思われる。一方、東南アジア向けとみられる磁器はIV期に引き続き福建・広東系の磁器であり、36%を占める。この主体は福建南部産の磁器であり、とくに徳化窯を中心とする。徳化窯の特徴的な磁器としては型押成形によって作られ、口禿にして窯詰め焼成した碗皿である。染付、白磁、色絵、褐釉、瑠璃釉などがある。大量生産によって価格も安かったに違いない。広く東南アジアから台湾、日本にみられ、日本では沖縄や長崎で相当量出土している。IV期までの福建・広東系磁器は比較的素地が悪く、焼成不良もあって淡褐色や灰色を帯びたものが主であった。それがV期になると素地は景德鎮並みに白いものが普通となる。

VI期（18世紀末～19世紀）の中でバンテン・ラーマがオランダによって破壊されたように、バンテンの終末期のために出土割合は全体の9%と激減する。景德鎮磁器はほとんどなく、主に福建・広東系磁器であるが、19世紀後半になるとヨーロッパ陶器の食器が中心になることは注意しなければならない。バンテンを破壊したオランダが破壊後に一時入っていたのであろうか、あるいはオランダ支配によってヨーロッパ陶器が陶器市場の中心になるのであろうか。今後の研究課題である。

海外輸出された肥前陶磁器の特質については、すでに1990年の『海を渡った肥前のやきもの展』図録で詳細に述べたが、その後の整理で明らかになったことも加えて概略をまとめると次のとおりである。

肥前磁器の輸出は1647年には始まっていたことが、オランダの記録から知られるが、それを裏付けるように、バンテン遺跡では1630～40年代の手塩皿などが少量出土している。また1650年代頃の初期色絵大皿や吉田窯の色絵皿も出土している。これらは海外での出土はバンテン遺跡とジャカルタのパサール・イカン遺跡、つまりインドネシアでのみ発見されている。

1655～70年代には染付雲龍見込荒磯文碗・鉢が目立つが、これはベトナム、タイ、マレーシアなどでも出土しており、東南アジア向けの肥前磁器がバンテンでも出土する。

バンテンにおける肥前磁器をみると、先述の色絵大皿だけでなく、17世紀後半の青磁大皿、染付

芙蓉手大皿、肥前陶器大皿など大皿がベトナム、タイに比べて多いことである。ベトナムでは碗・鉢と小皿が主たる器種であるから明らかに違いが認められる。それぞれの食生活の違いに基づく可能性が強い。

また東南アジアの中ではインドネシアのみで、18世紀前半に入ってもなお肥前（有田）磁器が出土する。内容的にはインドネシア向けのものというより、ヨーロッパ向けの磁器である。オランダ船がヨーロッパへ肥前磁器を運ぶ際に、必ずアジア貿易の根拠地バタヴィア（現ジャカルタ）を経由したからであろう。この時期の肥前磁器が出土するのは、次の重要な中継地ケープタウン（南アフリカ）である。

このようにバンテン遺跡から出土した膨大な量の陶磁器をみると、16～19世紀におけるこの地域の陶磁器流通の変遷がわかると共に、日本のこの時期における陶磁器流通内容との異同も明らかとなる。器種の組み合わせ内容も含めて、地域間の比較研究を進める上で、一つの資料としてまとめてみた。

（大橋康二）

註

- (1)——Mundardjito, Hasan M. Ambarly & Hasan Djafar “LAPORAN PENELITIAN ARKEOLOGI BANTEN 1976”, Berita Penelitian Arkeologi, No. 18, Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional, 1978 Jakarta
- (2)——Hasan M. Ambarly “EXCAVATION REPORT AT PASAR IKAN JAKARTA”, The Ceramic Society of Indonesia, 1981. 三上次男「パサリカン遺跡出土の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』2, 日本貿易陶磁研究会, 1982
- (3)——大橋康二「東南アジアに輸出された肥前陶磁」『海を渡った肥前のやきもの展』佐賀県立九州陶磁文化館, 1990
- (4)——ナニッ・ウィビソノ他「イスラム時代インドネシアの貿易陶磁」『貿易陶磁研究』13, 日本貿易陶磁研究会, 1993
- (5)——McKinnon, E. Edwards “Banten Girang and Banten Lama, SPFAFA Training Course on Conservation of Ancient Cities and/or Settlements”, 1991, Jakarta. 坂井 隆「マラッカ海峡沿岸港市の外来文化と伝統生活—スマトラなどの遺跡表採遺物より—」『社会科学討究』107, 早稲田大学社会科学研究所, 1991など
- (6)——ハッサン・アムバリイ, 坂井 隆編『肥前陶磁の港バンテン』穂高書店, 1994
- (7)——大橋康二・坂井 隆・扇浦正義「インドネシア・バンテン遺跡出土の中国・日本陶磁器」『日本考古学協会第60回総会研究発表要旨』1994
- (8)——GUILLOT, C., Lukman Nurhakim & Sonny Wibisono “Banten avant l’Islam: Etude archeologique de Banten Girang (Java-Indonesie) 932?-1526”, Publications de l’Ecole Francaise d’Extreme-Orient, 1994, Paris
- (9)——生田 滋訳『トメ・ピレス 東方諸国記』, 大航海時代叢書1-5, 岩波書店, 1986
- (10)——坂井 隆「スダ海峡地域の城郭都市遺跡—バンテン・ギラン遺跡調査参加記」『東南アジア考古学会会報』12, 東南アジア考古学会, 1992や註8
- (11)——註1
- (12)——坂井 隆他「インドネシア・ティルタヤサ遺跡の肥前陶磁」『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』日本考古学協会, 1998
- (13)——GUILLOT, C. “THE SULTANATE OF BANTEN”, Gramedia, 1990, Jakarta
- (14)——生田 滋「東南アジア群島部における港市国家の形成—十六世紀末のバントゥンを例として—」『東洋文化』72, 1992, 坂井 隆「港市の橋」『物質文化』62, 物質文化研究会, 1997
- (15)——註4
- (16)——JOHN AYERS “CHINESE CERAMICS IN THE TOPKAPI SARAY MUSEUM ISTANBUL” SOTHEBY’S PUBLICATIONS, 1986, London
- (17)——長崎市埋蔵文化財調査協議会『万才町遺跡』

- 1996の第37図45。褐釉磁のクンディは沖縄県教育委員会『慶来慶田城遺跡』1997の第28図がある。
- (18)——Sumarah Adhyatman “KENDI” Jakarta, 1987の図107, 108
- (19)——平戸市教育委員会『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ, 鄭成功居宅跡の発掘』1992の48～51頁
- (20)——長崎市埋蔵文化財調査協議会『栄町遺跡』1993の第36図51
- (21)——Maria Antónia Pinto de Matos “Chinese Export Porcelain From THE MUSEUM OF ANASTÁCIO GONÇALVES, Lisbon, 1996, Philip Wilson, Londonの83頁
- (22)——Colin Sheaf & Richard Kilburn “The HATCHER PORCELAIN CARGOES, The Complete Record” Oxford, 1988, Julia B. Curtis “TRANSITION WARE MADE PLAIN; A WRECK FROM THE SOUTH CHINA SEA” Oriental Art Summer 1985, vol. 101011 No. 2
- (23)——姚澄清・孫敬民・姚連紅「試談広昌紀年墓出土の青花瓷盤」『江西文物』1990-2の86～89頁
- (24)——註19の48～51頁
- (25)——長崎市教育委員会『出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』1986のFig. 37-3
- (26)——註19の第165図241
- (27)——大阪市文化財協会『住友銅吹所跡発掘調査報告』1998の図面24-341～343。康熙頃のものであろう。
- (28)——熊本県立美術館『永青文庫展11, 明・清の美術と工芸』1981の図20
- (29)——坂井隆他「インドネシア・ティルタヤサ遺跡と肥前陶磁」日本考古学協会第64回総会研究発表要旨, 日本考古学協会, 1998の143～146頁
- (30)——李正中・朱裕平『中国古瓷銘文』芸術図書公司, 台北, 1992
- (31)——CHRISTIE'S Amsterdam B. V. “The Vung Tau Cargo, Chinese Export Porcelain” 1992, Amsterdamの図864
- (32)——註31の図249
- (33)——註31の図546～550, 793
- (34)——Julia B. Curtis “TRANSITION WARE MADE PLAIN; A WRECK FROM THE SOUTH CHINA SEA” Oriental Art Summer 1985 vol. XXXI, No. 2のFig. 2や註22のpl. 96
- (35)——C. J. A. Jörg “Chinese Ceramics in The Collection of The RIJKS MUSEUM”, Amsterdam, 1997の図328
- (36)——Natthapatra Chandavij. “Ceramics From Excavations Lop Buri 1986-1987”, Bangkok, 1989
- (37)——Sumarah Adhyatman “Antique Ceramics found in Indonesia” The Ceramic Society of Indonesia, Jakarta, 1981の図330の上
- (38)——註21の226頁
- (39)——東京都江戸東京博物館『掘り出された都市』1996の図1-57
- (40)——佐賀県立博物館『売茶翁』1983の22頁
- (41)——註21の259頁
- (42)——註21の268頁
- (43)——江北町教育委員会『焼石遺跡Ⅰ』1997の図13-66
- (44)——福建省博物館『漳州窯』福建人民出版社, 1997
- (45)——森毅「大坂で使われたベトナム製陶磁器」葦火40号, 1992。なお五彩の色絵皿はベトナムではなく徳化窯産。
- (46)——長崎市教育委員会『築町遺跡』1997
- (47)——香港大学馮平山博物館『徳化瓷』1990, 徐本章・葉文程『徳化瓷史与徳化窯』華星出版社, 1993
- (48)——坂井隆「アンピン壺のたどった海」『最新海外考古学事情Ⅱアジア編』ジャパン通信情報センター, 1996, 菊池誠一「ベトナム発見の安平壺」東国史論第12号, 群馬県考古学研究会, 1997
- (49)——長崎市教育委員会『出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』1986の図72
- (50)——註31
- (51)——臧振華・高有徳・劉益昌「左営清代鳳山県旧城聚落的試掘」『中央研究院歷史言語研究所集刊』64-3, 中華民國, 1993。謝明良「左営清代鳳山県旧城聚落出土陶瓷補記」台湾史研究第3卷第1期, 中央研究院台湾史研究所, 中華民國, 1996
- (52)——葉清琳「安溪青花瓷器的初步研究」“ANCIENT CERAMIC KILN TECHNOLOGY IN ASIA” edited by Ho Chuimei, University of Hong Kong, 1990の図版3-5
- (53)——註52の楊少祥「広東青花瓷器初探」の4頁
- (54)——Ho Chuimei “Minnan Blue-and-White Wares” BAR International Series 428, 1988
- (55)——森毅「江戸時代の唐物と和物」大阪市文化財協会『葦火43号』1993
- (56)——香港大学馮平山博物館『徳化瓷』1990の図134, 註54のpl. 19
- (57)——C. J. A. Jörg “The Geldermalsen History and Porcelain” Kemper Publishers Groningen, 1986の図88
- (58)——註52の徐本章「試談徳化窯青花瓷裝飾藝術及其影響」88～97頁

- (59)——註22
 (60)——註31
 (61)——註57
 (62)——大橋康二『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』九州陶磁文化館, 1984
 (63)——大橋康二・尾崎葉子『有田町史古窯編』有田町, 1988の図版59-3, 第74図4
 (64)——同上の第141図1
 (65)——大橋康二『嬉野町吉田2号窯跡』九州陶磁文化館, 1989
 (66)——有田ポーセリンパーク『陶磁の東西交流展』1993の図28
 (67)——註3の図222, 大橋康二「トルコで発見した肥前の青磁」目の眼No.259, 里文出版, 1998
 (68)——Sir Francis Watson "MOUNTED ORIENTAL PORCELAIN" 1986
 (69)——Filip Suchomel "MASTERPIECES OF JAPANESE PORCELAIN" PRAGUE, 1997, C. KAT. 9
 (70)——Oliver Impey "Barry Davies Oriental Art, KO-IMARI PORCELAIN FROM THE COLLECTION OF OLIVER IMPEY", London, 1997の図25
 (71)——註3の図54
 (72)——註25のFig. 34-12/13
 (73)——大橋康二「海外輸出された肥前磁器の特質について」『王朝の考古学』雄山閣, 1995の第2図I-I, 同類の大皿は註69のC, KAT. 25
 (74)——註3の図60
 (75)——註70のNo. 115/116. 同書では両方とも1690年代頃とするが, 115は古いタイプであり, 1690~1710年代であるが, 116は1730~60年代。
 (76)——註57の図108
 (77)——註3の図322
 (78)——註25のpl. 23-6, pl. 24-13
 (79)——註3の図38
 (80)——註3の図220
 (81)——註39
 (82)——愛知県陶磁資料館『東南アジアのやきもの』1987
 (83)——根津美術館『南蛮・島物』1993
 (84)——菊池誠一「16・17世紀の中部ベトナムの陶磁生産」古代学研究138号, 1997
 (85)——註40
 (86)——平戸市教育委員会『平戸和蘭商館跡』1988の第21図35
 (87)——永松実「発掘された食文化の洋風化について」『長崎出島の食文化』親和銀行, 1993
 (88)——B. E. J. S. Werz "The Excavation of the Oosterland in Table Bay", South African Journal of Science 88, 1992の85-89頁

参考文献

坂井 隆

- 1993A「日本輸出陶磁バンテン国際セミナー報告」『東南アジア考古学会会報』13, 東南アジア考古学会
 1993B「肥前陶磁の輸出と鄭氏・バンテン王国」『東南アジア—歴史と文化—』22, 東南アジア史学会
 1993C「イスラム港市バンテン—博多・堺・長崎との比較で—」『社会科学討究』113, 早稲田大学社会科学研究所
 1993D「インドネシアの港市バンテン」『Museum Kyushu: 文明のクロスロード』12(2)
 1995「東南アジアと日本の中近世港市—図化資料から見た港市の防衛と機能—」『日本考古学』2, 日本考古学協会
 1996「17世紀の陶磁貿易—アンピン壺の流通をめぐって—」『日本考古学協会第62回研究発表要旨』
 1998A「『伊万里』からアジアが見える」選書メチエ130, 講談社
 1998B「インドネシア・ティルタヤサ遺跡の共同調査」『Museum Kyushu: 文明のクロスロード』61

坂井 隆他

1998『世界の考古学 東南アジア』同成社

渋沢元則

1981訳『ハウトマン ファン・ネック 東インド諸島への航海』大航海時代叢書2-10, 岩波書店

ハッサン・アムバリイ

1993「バンテン・ラーマ港市遺跡の特徴」『東南アジア考古学会会報』13

HALWANY Michrob, 1998: HISTORICAL RECONSTRUCTION AND MODERN DEVELOPMENT OF THE ISLAMIC CITY OF BANTEN, INDONESIA, dissertation for Univ. Chiba

Hasan M. Ambary, Halwany Michrob & John N. Miksic, 1988: KATALOGUS KOLEKSI DATA ARKEOLOGI BANTEN, Departmen Pendidikan & Kebudayaan, Jakarta

大橋康二 (佐賀県教育庁, 国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員)

坂井 隆 (群馬県埋蔵文化財調査事業団)

Ceramics from the Site of Banten in Indonesia

ŌHASHI, Kōji and SAKAI, Takashi

The site of Banten Lama (old Banten), located at western Java in Indonesia, was a capital of the Islamic kingdom of Banten which flourished on the 16th to the 18th centuries. Since 1976, the excavation of this site has been conducted by the National Research Center of Archaeology, and were found numerous porcelain fragments. We analyzed those artifacts, so that were able to classify into total of 25,076 the estimated individual numbers by their producing districts, date and kind. The majority of the porcelains were manufactured from the 16th to the 18th centuries, when the Banten kingdom was at the zenith. This Banten's ceramic assemblage shows a proportional change in their producing districts and kind through the periods.

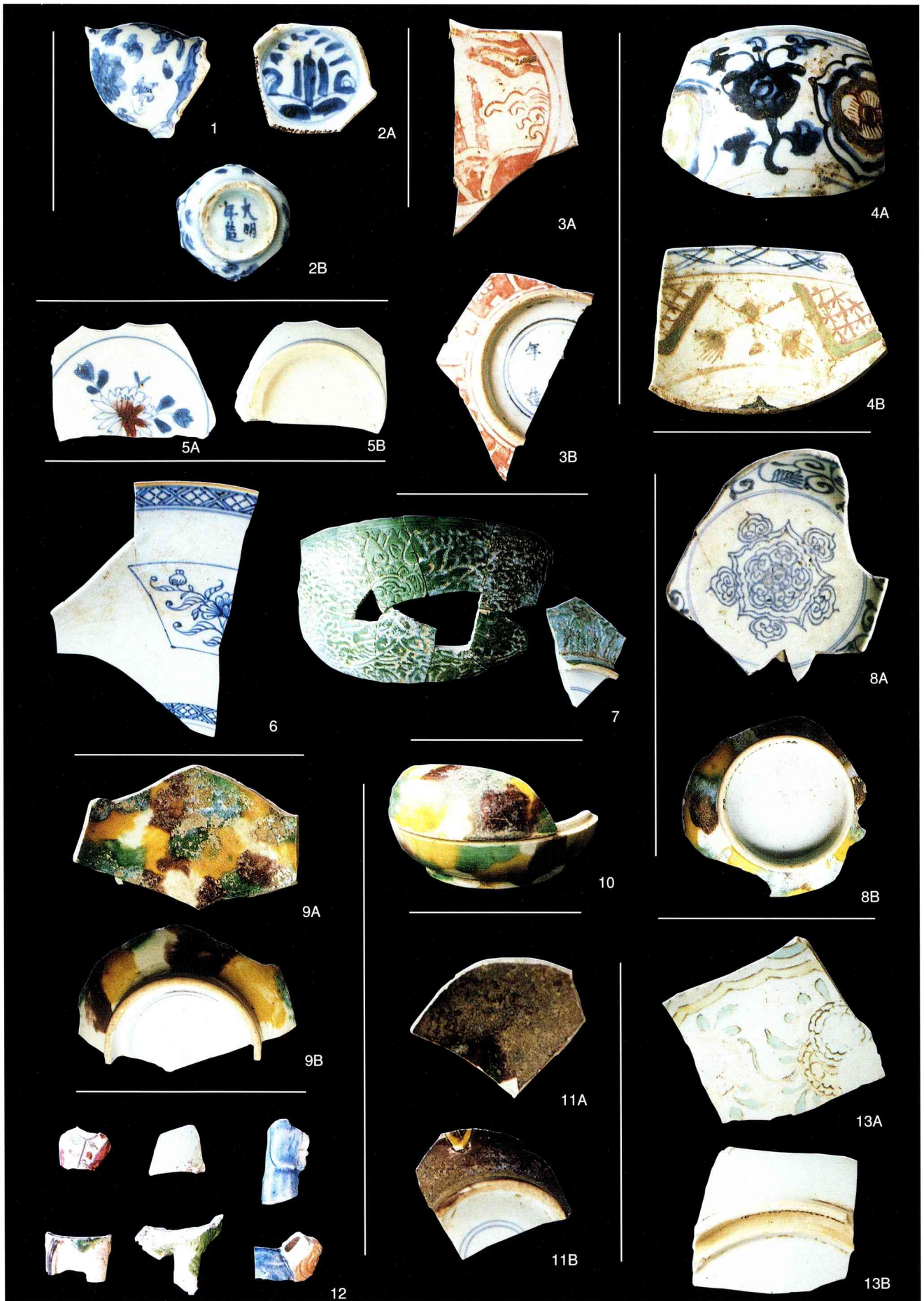
Few porcelains are identified to the I period (before the 16th century). During the II period (the early to middle 16th century), Jingdezhen porcelains were appeared, but only 1% of the assemblage.

The ceramics belong to the III period (after the late 16th to the early half 17th century) through the V period (the 18th century) amount to 89% of the total assemblage. This quantitative change is in accordance with the history of the Banten kingdom. During the III period, Chinese porcelains visibly increased up to 45% of the total. Because particularly after 1590' in addition to Jingdezhen (35%) southern Fujian wares newly began to be imported. And on this time the Dutch, followed after England, entered into the Asian trade.

In the IV period (the late half 17th century to the early 18th century), the civil war associated with the transition from Ming to Qing dynasty in China (after 1644) caused a drastic decrease in export of Chinese porcelains, followed by the beginning of Japanese Hizen's export. Especially before 1683 Japanese Hizen porcelains were dominant over Chinese porcelains on Banten. However, as the trade prohibition of China was lifted in 1684, Chinese porcelains regained their prominence.

In the V period (the 18th century), the import Jingdezhen porcelains became active on Banten again, although Japanese Hizen (Arita) were still present. The majority of Jingdezhen and Hizen were originally manufactured for export to Europe, where the major part of porcelains for special export to Southeast Asia were Fujian and Guangdong wares before the IV period.

On the first half of the VI period (the late 18th to the 19th century), only a few Chinese porcelains were present in Banten, reflecting the collapse because of the Dutch invasion.



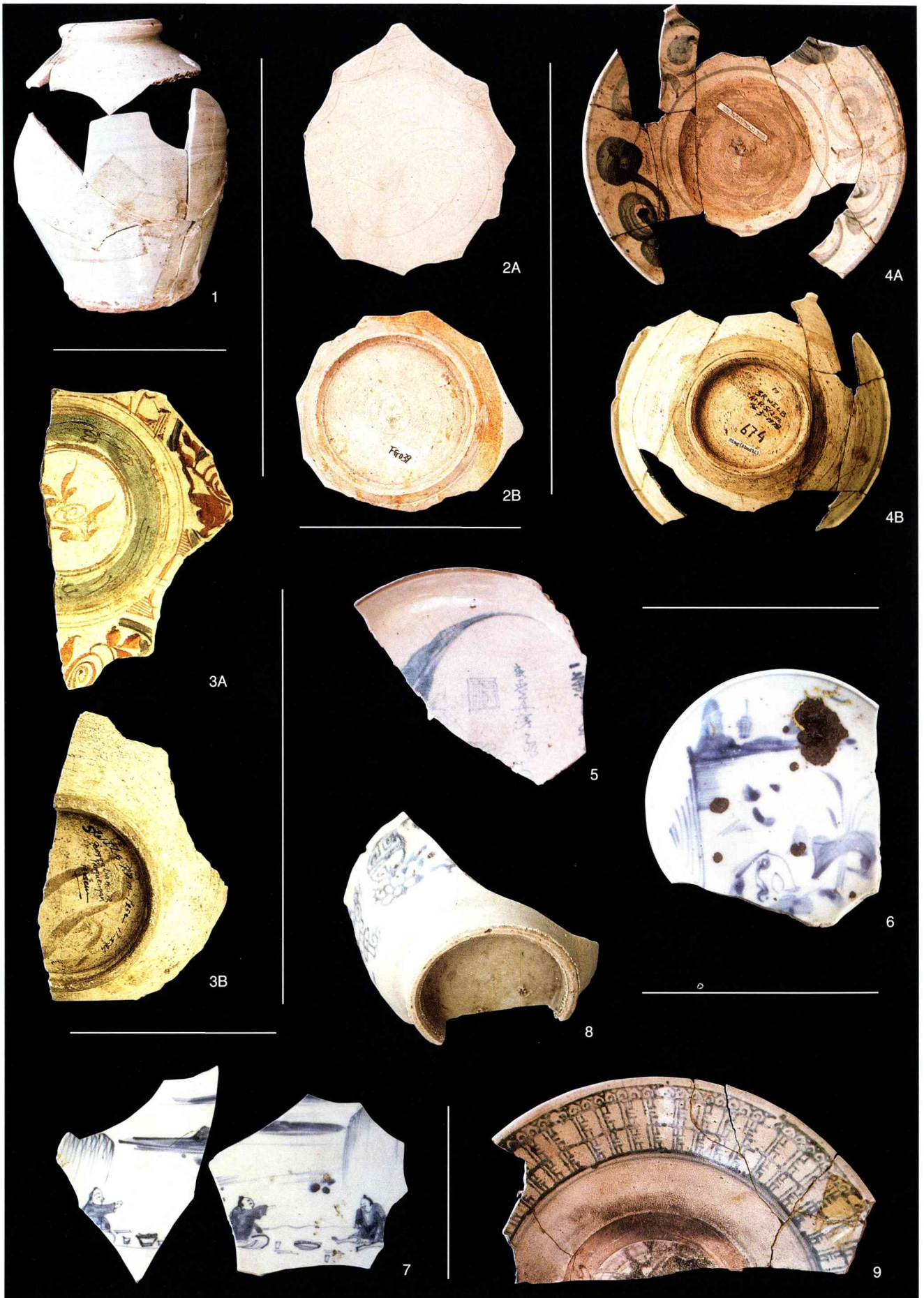
图版 1 中国磁器(1)



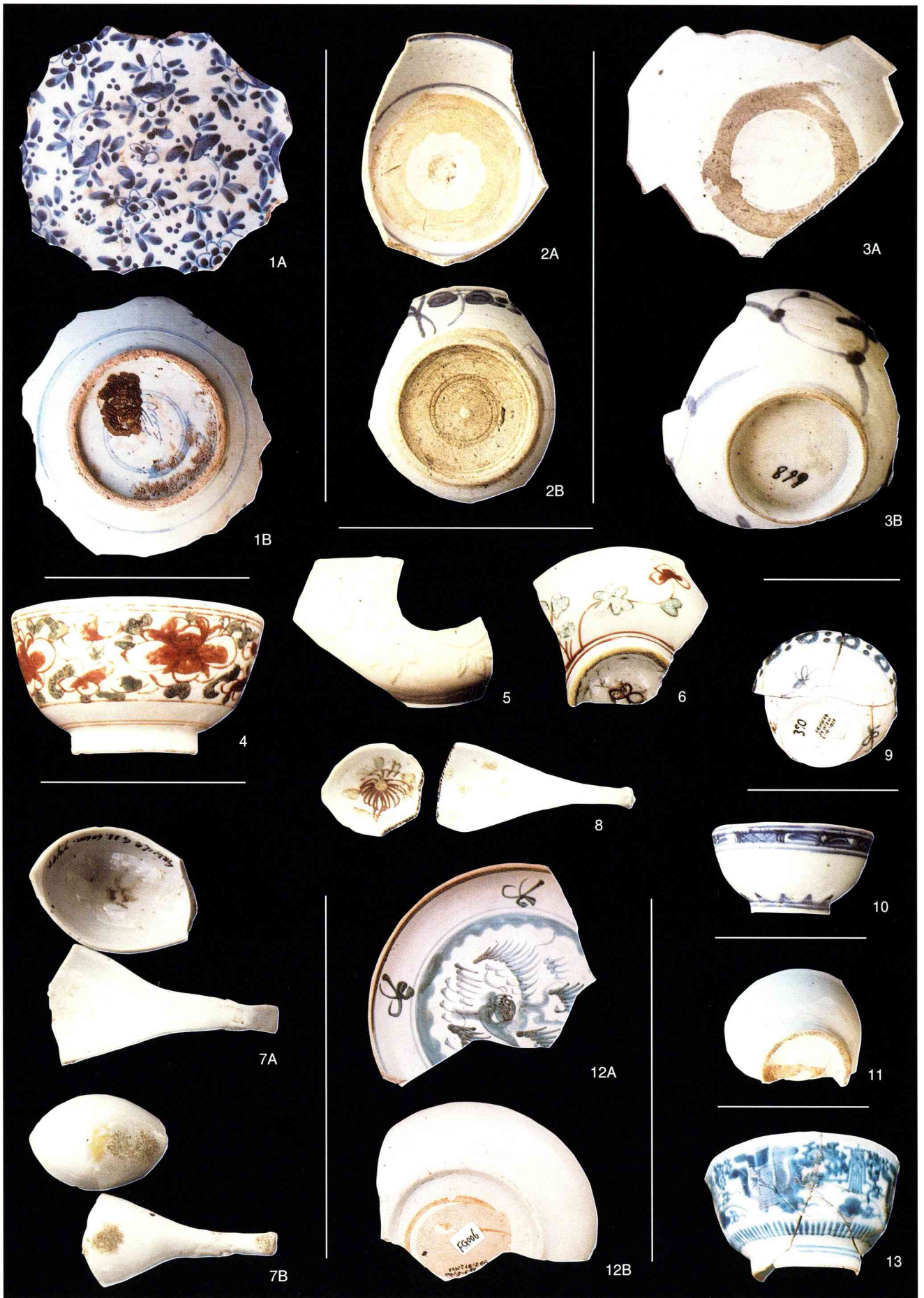
图版 2 中国磁器(2)



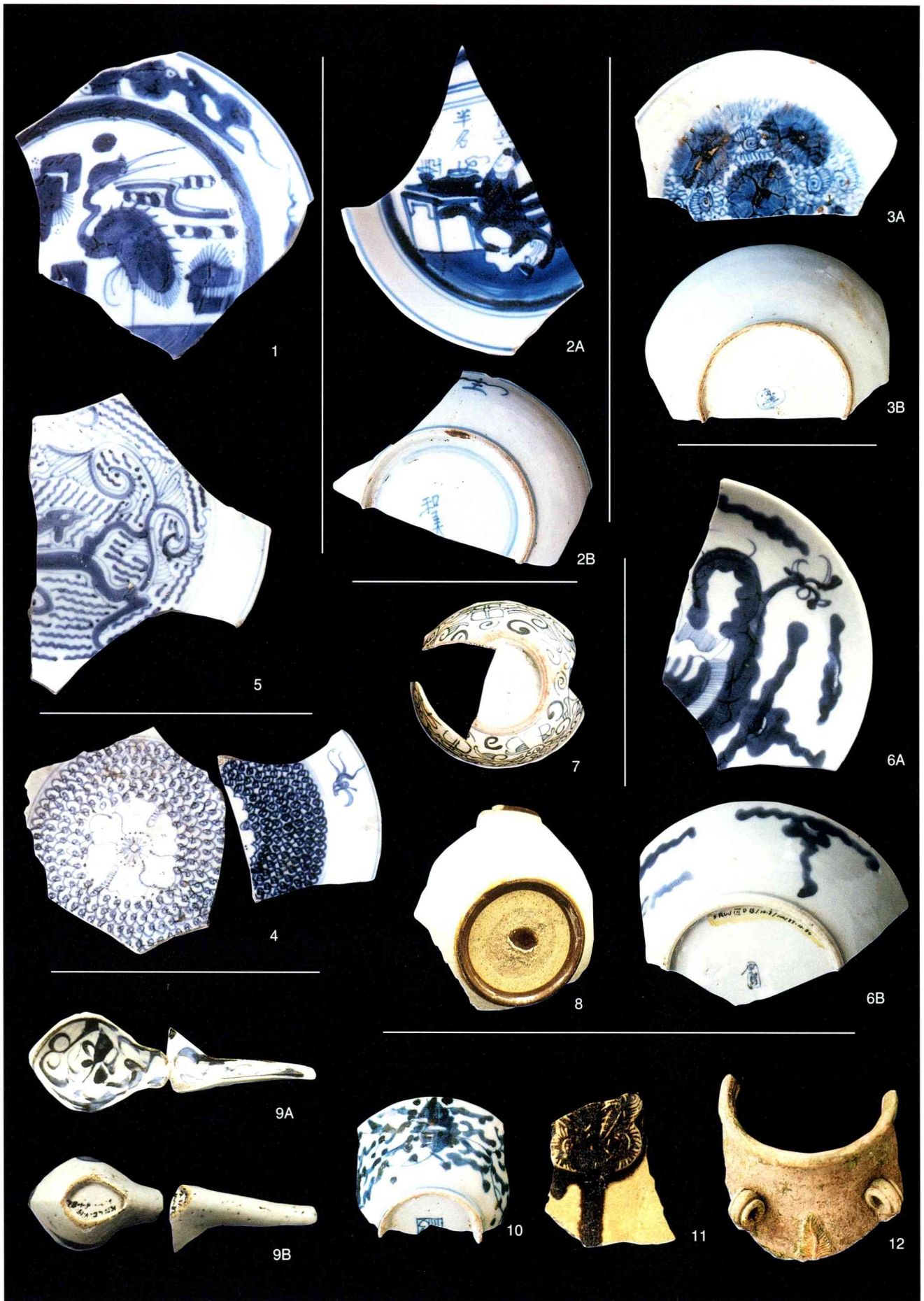
图版 3 中国磁器(3)



图版 4 中国磁器(4)



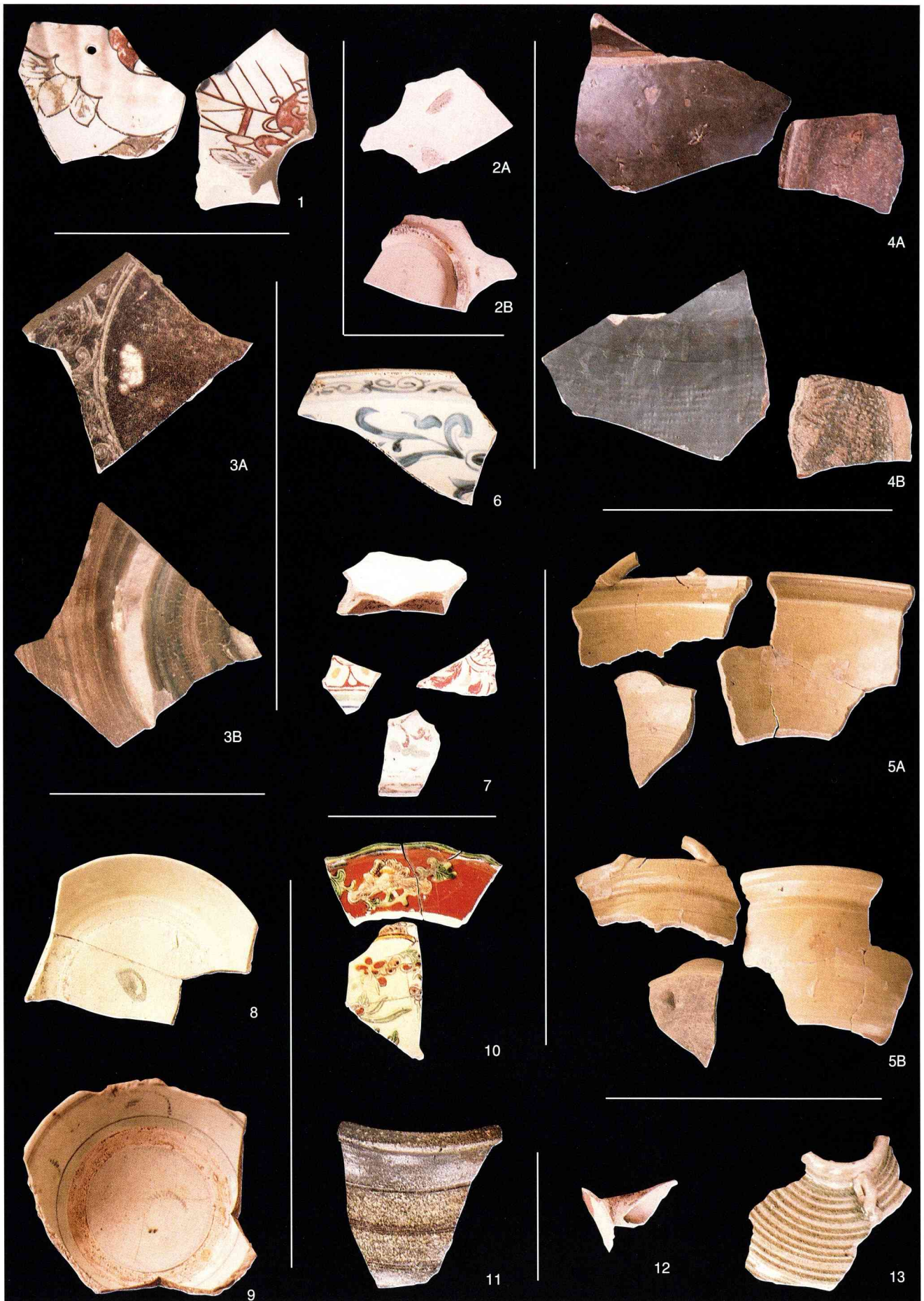
图版 5 中国磁器(5)



图版 6 中国磁器(6), 中国陶器(1)



图版 7 中国陶器(2), 肥前磁器(1)



図版 8 肥前磁器(2), 肥前陶器他, 東南アジア陶磁器(1)



図版9 東南アジア陶磁器(2), イスラム・ヨーロッパ陶器(1)



図版10 ヨーロッパ陶器(2)